

イギリスにおける歴史的産業遺蹟の保存運動 と観光資源化：ロバート・オーエンの 「ニューラナーク」の場合

MURAKUSHI, Nisaburo / 村串, 仁三郎

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

67

(号 / Number)

3・4

(開始ページ / Start Page)

67

(終了ページ / End Page)

133

(発行年 / Year)

2000-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004184>

イギリスにおける歴史的産業遺蹟の 保存運動と観光資源化

——ロバート・オーエンの「ニューラナーク」の場合——

村 串 仁三郎

目 次

はじめに

1. ロバート・オーエンの「ニューラナーク」
 - (1) デービッド・デールによる「ニューラナーク」の建設
 - (2) ロバート・オーエンの博愛的経営と社会改革の実験
 2. 「ニューラナーク」の保存運動
 - (1) 1960年代「ニューラナーク」の荒廃と保存運動の開始
 - (2) 1972年～83年「ニューラナーク」の保存運動の活発化
 - (3) 1983年～90年「ニューラナーク」の保存運動の展開と観光資源化
 - (4) 1990年～現在「ニューラナーク」の保存運動の継続と観光事業の展開
 3. 観光事業としての「ニューラナーク」
 - (1) 観光事業の概要
 - (2) 観光事業の成功
 - (3) 経営事情
- おわりに

はじめに

産業遺蹟や歴史文化遺蹟の保存、保護は、その国の文化水準や文化政策の実体をあらわしていて興味深い。しかも保護され修復された歴史文化産

業遺蹟は、観光資源化されることによって、さらに自国民の歴史認識、教育、教養を高める役割をはたすとともに、地域の経済発展にも大きく寄与している。

イギリスは、まさに歴史、文化、産業などの遺蹟、遺産⁽¹⁾を大切にし、その保全、保護に努力し、かつそれらを観光資源化しているレジャー・観光先進国である。

産業革命の祖国であったイギリスには、記念すべき歴史遺産として保存すべき産業遺蹟は多いが、それらが産業歴史遺蹟、遺産として保護され保存されていることは、イギリスの文化水準の高さを示しているものとして、わが国にとって興味深く、また大いに学ぶべき点が多い。

イギリスにおいて歴史文化遺蹟が遺産として保存の対象とされている事例は、途方もなく多い。その内、産業遺蹟として博物館化され、観光事業の一つとなっているケースも枚挙にいとまがない。

アリーは、イギリスにおける遺産産業について論じ、1980年代末に産業関係の資料をもつ博物館が486、郷土史に関するコレクションを所蔵する館が817あり、産業遺産センターが41設立されていると指摘している。またそのために膨大な投資がおこなわれており、たとえば1988年には上半期だけで1億2,720万ポンドも遺蹟、博物館、美術館に投資された、と指摘している。まさに遺蹟・博物館の産業化が生じ、それらが観光化されている傾向を明らかにしている⁽²⁾。

博物館の数は、第1表に示したごとく、近年いっそう増加し、90年代末には1,759にもたっしている。その内、イングリッシュ・ヘリテージが所管するものだけでも、古代遺蹟15,400、歴史的に貴重だと登記された建造物45万、歴史的に貴重な遺蹟409もある。

イギリスにおける産業遺蹟を博物館化し、観光化している産業博物館の類も、主要なものだけでも、第2表に示したように、233箇所にもおよんでいる。

イギリスの遺蹟の産業化・観光化については、厳しい批判もないわけで

第1表 イギリスにおける博物館、遺蹟等の数

政府機関		
Museums and Galleries Commission		1,759
English Heritage	Ancient monuments	15,400
	Listed buildings	450,000
	Conservation areas	9,000
	Historic properties	409
Historic Scotland	Ancient monuments	6,800
	Listed buildings	43,347
	Conservation areas	602
	Historic properties	300
民間		
National Trust	Historic buildings	300
National Trust for Scotland	Historic buildings	122

注：Anna Leask and Ian Yeoman, ed. HERITAGE VISITOR ATTRACTIONS, CASSELL, 1998, p.7, より作成。ただし natural heritage は省いた。

第2表 イギリスの産業遺蹟博物館数

(1990年代中葉)

	西南部	南東部	東部	中部	ウエールズ	北西部	北部	スコットランド	合計
種類									
風車	1	3	10	4	1	1	1		21
水車	3	4	4	7	3	5	5	14	45
蒸気エンジン施設	5	2		5		2	2	2	18
工場	12	1		3	4	5	4	2	31
鉄鋼・金属工場	1			5	4		3	3	16
鉱山	4			4	9	5	3	2	27
鉄道	7	11	5	13	11	4	12	3	66
船舶	3	4	4		2	4	2	3	22
合計	36	25	23	41	34	26	32	29	246

資料は、Fred Dibnah INDUSTRIAL AGE, 1999, BBC, から作成。

はないが、脱工業化社会の新産業として、軍事産業や環境破壊産業と対照的に平和的で文化的、教育的で人間的な産業として肯定する立場も少なくはない。アリーなども、遺蹟産業の軽薄な傾向に批判をくわえてはいるが、本質的に遺蹟産業の存在を承認している⁽¹⁾。

小論の課題は、遺蹟産業を肯定的にとらえながら、こうした産業遺蹟の保存と観光資源化が、どのようにしておこなわれているか、そしてそこにある問題点は何かを、ロバート・オーエンにより経営され、かつ初めての革新的な社会改革あるいは改革主義的社会主義の実験をこころみたニューラナークの紡績工場とそのピレッジの事例を取りあげて、考察することである。

- (1) heritage の訳語について一言しておけば、一般に遺産と訳されている。たとえばユネスコの世界遺産 (World Heritage) のように、一般に heritage industry という時に、遺産産業と訳されたりしている。私は、ヘリテージを遺蹟と遺産の2通りに訳したが、おもに遺蹟の用語を使用した。ヘリテージというカタカナも魅力的で少し使用したが、とくに意味はない。もともと heritage という用語は、後世から現世の人々にのこされた財産の謂であり、イギリスでは natural heritage という言い方さえある。つまり海岸線など特殊な自然をさしている場合もある。そうしたものを遺蹟とは呼ばないが、産業ヘリテージをさす場合は、遺蹟しかも破壊され、崩壊しつつある産業施設などは、遺蹟という用語がふさわしいように思われる。
- (2) ジョン・アリーは、『観光のまなざし』(法政大学出版会、1995年、原著の出版は、1990年)187-9頁。
- (3) 同上、第6章の後半を参照。

1. ロバート・オーエンの「ニューラナーク」

(1) デービッド・デールによる「ニューラナーク」の建設

ニューラナーク (New Lanark) は、1785年に、スコットランドの産業家デービッド・デール (David Dale) によって、スコットランド南中

中央ラナークシャーの、グラスゴーとエディンバラから南に40～50キロほどはなれたラナーク町の端の一画に開かれた地域であり、初期産業革命の中心であった最先端の技術、クライド（Clyde）川の水車を動力としミュール機械紡績をおこなう工場群が設立され、当時としては博愛的にあつかわれた労働者が住居したビレッジであった。またデールの娘と結婚して1780年から経営を引き継いだロバート・オーエン（Robert Owen）が、博愛的な経営と革新的な社会改革、それは改良主義的社会主義の香りの漂う実験をこころみた場所として、一時は「社会改革家の聖地」⁽¹⁾となり、その後衰退し、ほとんど忘れられかけていたとはいえ、社会改革を実行し、最初に社会主義の実験をこころみた歴史にのこる記念すべき場所であった。

デービット・デールは、1739年にスコットランド南西部、エアーシャー、スチュワートン（Stewarton）の食品雑貨商人の子として生まれ、織物工の徒弟としてグラスゴー近くのペイスリー（Paisley）で働き、その後、ラナークシャーで、村々をまわって農婦からピクルスを買い上げる仕事をしてきた。1760年代にグラスゴーに定住し、1763年に絹商人アーチバルド・バターソンの事務員として働き、共同経営者となった⁽²⁾。

第1図 ニューラナークの所在地



その後二人は、宗教活動に関係し、スコットランド教会の中の一宗派に参加した。しかしバターソンは、事業の面ではたいした人物ではなかったが、デールが繊維産業で事業をおこす際には、資金的な後ろ盾として重要な役割をはたした。

1770年代にデールは、グラスゴー市の商人ギルドのメンバーとなり、その代議員となった。デールは、薄地綿布の販売にたずさわり、糸輸入業で成功をおさめた。彼は、こうして急速に当時の典型的な綿布製造業者となり、富と地位を獲得した。

そして1777年にデールは、多くの同僚のように、貴族や銀行家に姻戚をもつ名家の女性と結婚して、金融的な基盤を強化した。以前の共同経営者とはわかれ、新しくグラスゴーのロイヤルバンク支店長ロバート・スコット・モンクリーフと提携し、さらに大きな成功をおさめた。

1784年に水車動力による紡績機械を発明し、ダービーシャーのクロムフォードで紡績工場を経営していたリチャード・アークライトが⁽³⁾、スコットランドを訪れたが、そこでデールと巡り合い、近辺に繊維労働者や石工などがあるラナーク近くの、水量が豊富で水車に適したクライド川沿いに綿糸の紡績工場を建設することにした。

デールは、アークライトとの連携を土壇場で解消して、独自に1786年ニューラナークに紡績工場を設立し、労働者住宅を建設し、労働者の住むビレッジを開設した。デールによる工場とビレッジの建設は、1786年からおこなわれ1790年半ばまでに、4工場と労働者住宅数棟を建設した。

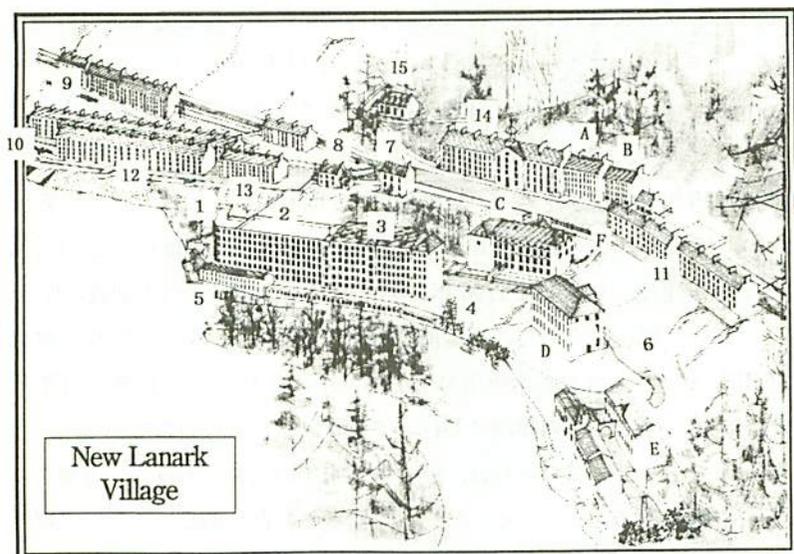
それは、当時の火災保険会社の評価によれば、工場2,000ポンド、機械と設備が2,500ポンド、二つの建物が300ポンドであったが、1800年には4工場の評価額は30,000ポンドにもなっていた⁽⁴⁾。

今日保存運動の対象になった「ニューラナーク」とは、四つの工場と工場付属施設、数棟の労働者用住宅群であるが、1786年から90年代に基本的に、デービッド・デールによって建設されたものである。第2図に示したように、川沿いに西から第1ミル、第2ミル、第3ミル、第4ミルとよ

ばれる紡績工場が建設された。

第1ミルは、1786年に最初に建てられた紡績工場であるが、1788年に焼失し、1789年に再建された。第2ミルは、1788年に建てられた。ともに建物の横15メートル、奥行き9メートル、高さ20メートル、6階建、それに地下と屋根裏部屋をもった大きなものであった。

第2図 ニューラナークの建物配置図



ニューラナーク建物一覧表

- | | |
|------------------------------|---------------------------------|
| 1 No. 1 mill (1786) | 11 Caithness Row (1792) |
| (1788年に焼失、1789年に再建) | 12 Double Row (1795) |
| 2 No. 2 mill (1788) | 13 Wee Row (1795) |
| 3 No. 3 mill (1795) | 14 New Building (1798) |
| (1819年に焼失、1826年に再建) | 15 Church (1798) |
| 4 No. 4 mill (1795) | A Nursery Buildings (1809) |
| (1883年に焼失後そのまま) | B Village Store (1809?) |
| 5 Low shed (1780年代) | C The Institute (1816) |
| 6 Mill Lade (1780年代) | D The School (1817) |
| 7 Robert Owen's House (1790) | E Workshops and Dyeworks (1809) |
| 8 David Dale's House (1790) | F Counting House (1817) |
| 9 Braxfield Row (1790) | |
| 10 Long Row (1790) | (A以下はオーエンによる建築) |

注：各種資料より作成。図は、THINKING of HERITAGEより加筆、引用。

第3ミルと第4ミルは、1793年までに建てられた。第3ミルは、第1ミルなどより少々小さめであったが、第4ミルは、長さ51メートル、奥行き11メートル、高さ33メートルで大きめであった。第3ミルは、1819年に火事にあい1826年に再建された。第4ミルは、1883年にやはり火事であったが、ついに再建されず跡地はそのままになった。

事業の拡大とともに、工場のほか1890年には後にデール・ハウスとオーエン・ハウスとよばれるようになる経営者の屋敷が2棟と労働者用の集合住宅、ブラックスフィールド・ロー (Braxfield Row)、ロンゲー・ロー (Long Row) が建設された。1792年にはケイスネス・ロー (Caithness Row) とが建設された。1793年には、第3ミルと第4ミルが建設された⁽⁶⁾。1795年には、ダブル・ロー (Double Row)、ウィー・ロー (Wee Row)、1798年には、ニュービルディング (New Building) などの労働者住宅棟が建設され、また1798年にチャーチ (Church) など建設された。

この他、工場施設として、工場前の川沿い Low sheds とよばれる倉庫に Mill Lade とよばれる水車用の用水路が建設されたが、正確には年代がわかっていず、工場の建設に並行して建設されたといわれている⁽⁶⁾。

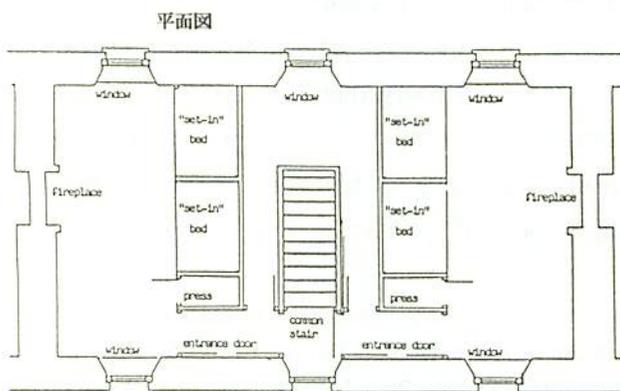
デービッド・デールの経営は、彼の宗教的な崇高さもあって、労働者にたいして博愛的であった。とくに児童労働者の教育に熱心であり、工場内に学校を設置して児童教育を熱心におこなった。たとえば、デール自身の書いているところによれば、1790年代の学校には、507名の生徒がおり、16名の教師が雇われていた。13名が生徒に読み方を、2名が書き方を、そして1名が絵の描き方を教えた。またその他1人が裁縫と、もう1人が時々教会音楽を教えた。クラスは、生徒の成績進度に応じて8クラスにわけられ、クラスには1、2名の教師が配置されていた。

日曜日に生徒たちは、教会にいったが、150人程度しか入れないので、集会は交代でおこなわれた。その他、働いている年少の子供たちには、夜学や2日間学校があり、自分の教科書をのぞきすべて無料だった⁽⁷⁾。なおこの学校の校舎は、オーエンが建設したものとは異なり、別の建物でおこ

なわれていた。

またデールの建設した労働者の集合住宅は、4～5階からなるしっかりした建物で、1軒分が2部屋あって（第3図参照）、1家族に1室があたえ

第3図 労働者の住宅図



想像図



注：ニューラナークのビジターセンターの資料から引用。

1住宅は、2部屋からなっていて、1家族は1部屋を利用するようになっていた。中央に階段があり、部屋の両端には暖炉が切っている。ベッドの下には、ベッドがあり、寝夜に引き出すようになっている。

られた。それは、かなり狭いが、初期産業革命期の労働者住宅として、また近代の労働者住宅史の上からみてもかなり良質なものであった。

デールは、1806年に没している。ロバート・オーエンが、デールの娘と結婚して、1800年にデールから経営を引き継いでから、1809年に Mechanics Workshops とよばれる機械工作工場と染色工場 (Dyeworks) が建設された。ロバート・オーエンの経営方針を反映して、1809年にナーサリー・ビルディング (Nursery Building) とビレッジ・ストア (Village Store), 1816年にインスティテュート (The Institute), 1817年に学校 (The School) などが建設された。ケイスネス・ロー棟に会計事務所 (Counting House) も併設された。

- (1) デービッド・デールについては、つぎの文献を参照した。

Ian Donnachie and George Hewitt, HISTORIC NEW LANARK, 1993, Edinburgh University Press Ltd, Chapter2, New Lanark Conservation Trust, THE STORY of NEW LANARKS, 1998, David J. McLaren, DAVID DALE of NEW LANARK, 1999.

- (2) マックス・ベア『イギリス社会主義史 (二)』, 岩波文庫版, 9頁。
 (3) ニューラナークと同様にアークライトのクロムフォード紡績工場の保存運動もおこなわれており、規模は小さくまだはじまったばかりで、大きな運動になっていないが、今後発展していくことが予想される。これについては、産業考古学会の学会報 (第90号, 1998年11月) に、亀田光三氏の簡単な報告「英国産業考古学の活動に学ぶ」があるので参照されたい。
 (4) 前掲 HISTORIC NEW LANARK, p. 25, p. 27.
 (5) 第3工場, 第4工場の建設は95年という説もあるが、ここでは同上書の93年説 (p. 26) をとった。
 (6) 建物の詳しい建設事情については、同上書, Chapter3, 4とニューラナーク保存トラストの資料による。
 (7) 前掲, DAVID DALE of NEW LANARK, Chapter 4, を参照。

(2) ロバート・オーエンの博愛的経営と社会改革の実験

1800年にデールの娘と結婚してニューラナークの経営を引き継いだロ

バート・オーエン (Robert Owen) は、1771年にウェールズ中部のモンゴメリーシャーの小商業都市ニュータウン (Newtown) に生まれた⁽¹⁾。父親は馬具製造業者兼金物屋であった。

7人の子供の6番目の子であったオーエンは、自由で聡明で音楽やスポーツが好きで子供であった。すでに7歳にしてその地方の学校教師と同じくらいの学識をもっていたといわれている。彼は、読書好きで、地元名士の子息の1人として、名士が利用する図書館に出入りした。つまり相当の早熟の子供であった。彼は、7、8歳の時に、教師のアシスタントとして生徒を教える生徒であった。その後、教師のアシスタントを止めて、自分の家の隣りにあった織物商店兼雑貨商店の徒弟となった。

1781年10歳の時に馬具製造職をいとなむ兄のいるロンドンに出てしばらく後、リンカーンシャーのスタンフォード (Stumford) でスコットランド製織物商店をいとなむ McGuffog の徒弟となった。オーエンは、主人が子供がいなかったこともあって、実の子のように大切に扱われ、良好な条件のもとで織物業の仕事を学ぶことができた。しかも主人が良質の図書室をもっていたので、ふたたび読書に励んだ。ここに3年間滞在したあと、オーエンは、しばらくロンドンの織物商店で働き、その後マンチェスターのサッターフィールド (Satterfield) 織物卸商会に就職した。ここで18歳まで働いた。

ここでオーエンは、若くして繊維関係、卸業や小売業の知識や実務を身につけた。彼は、ここで若い職工アーネスト・ジョンと知り合い、彼の兄から100ポンドを借りて、ジョンとともに、最新の技術によるミュール紡績製造業の共同経営をはじめた。これは3ヵ月しかつづかなかったが、オーエンは、新たに2人のスコットランド人と新式の紡績工場の経営を開始し、月24ポンドの利益をえた。こうして経営才能を示しはじめた。

19歳の頃、年俵100ポンドを要求してマンチェスターの Drinkwater が所有するバンクトップ紡績工場の経営者の職につき、500人の労働者の管理と原綿の買付け、綿糸の製造を任された。彼は、初めてアメリカから

原綿を輸入、綿糸の質を改善し評価された。またオーエンは、すでに成功の秘訣は、労働者の身体的道徳的環境が良いことであると信じて、工場で働く労働者の労働条件の改善をはかった。

こうして未だ 20 歳前後の彼の経営才能にたいする評判は、マンチェスターをこえて広がったといわれている。しかしオーエンは、ただそれだけの人物ではなかった。彼は、マンチェスター在住中に、相変わらず広範に読書し、一連の哲学的、科学的な問題に鋭い興味をいだきつづけた。1793 年には、マンチェスター文学哲学協会 (The Manchester Literary and Philosophical Society) の会員に推挙された。この協会には、マンチェスター市のすべての知識人が属しており、ルソー、ベンサム、ゴドウィン、ペイン、ウルストンクラフトや他の啓蒙哲学者の思想が研究されたり討論されたりしていた。そして彼は、協会の機関誌に「普遍的幸福と実業機械の関係」とか「社会的美徳の改善に関する見解の起源」とかいった論文を投稿している。

オーエンはまた、トーマス・パーシバルによって、工場労働者の健康と労働条件の改善を推進するために組織されたマンチェスター保健委員会 (The Manchester Board of Health) のメンバーにもなっていた。

こうしてみると、オーエンがすでに 20 歳前後に、いかに高い見識と社会改良や労働者の労働改善に深い思慮と情熱をもっていたかがわかる。

1774 年にドリンクウォーターとの関係をおえて、新たに当時の有能な実業家、ロンドンの Borradaile, Atkinson, マンチェスターの Barton らと共同してチョートン・ツイスト社 (Chorton Twist Company) を設立した。彼は、この会社の代表として、取引きのあるグラスゴーを訪れることになる。

オーエンは、そこで当時著名な産業家デービッド・デールの娘、Caroline を紹介され、1798 年にニューラナークにいて、工場を見学し、また経営主のデールにも会っている。こうしてオーエンとキャロラインは、相思相愛の関係となり、デールは両者の宗教的な相違を心配したが、オー

エンの名声もあって、結婚を認め、二人は1779年9月にグラスゴーのデール邸で結婚式をあげることになった。

オーエンは、チョートン・ツイスト社の共同経営者とともに、宗教活動に熱心だった61歳の老経営者デールからニューラナークを買い取り、オーエンが経営権を保持した。一時マンチェスターにもどっていたが、オーエンたちは、1800年1月にニューラナークにもどり、ここに住んだ。そこで7人の子供を産み育てた。

オーエンは、経営を引き継いだ数年、労働時間を13時間から14時間にしたり、個人の生産結果を厳しく監督したり、ピレッジ内を監視したり、秩序に反する行動を取り締まったり、かなり厳しい労務管理をおこなった。彼は、厳しい人とみなされ、ピレッジ内の評判はけって芳しくなかった。しかし彼は経営的にはすばらしい成功をおさめていった。工場経営の利益は、1799年から1810年にかけて9万ポンドにもたっし、また工場の資産価値は、1799年の6万ポンドから1813年までには11.4万ポンドに高まった。

オーエンは、経営的に成功をおさめただけでなく、1800年初年代の後半から自ら信じる信念、思想をもって、1825年頃までにオーエン独自の経営方針を打ち立て、後世にのこるさまざまな先進的で独創的な社会改革を実施していくことになる。また1830年代からは、ニューラナークの小さな世界をはなれて、アメリカにわたったり、帰国後イギリス社会に出て、社会改革運動に邁進することになる。

オーエンがニューラナーク内でその名声を博す大きなきっかけは、1807年にアメリカとの貿易摩擦でアメリカの原綿輸入ができず、価格が暴騰して数ヶ月工場が操業停止においこまれた時である。オーエンは、当時の何人も思いつかない対処をこころみた。つまり操業していない間の労働者に通常の賃金を払いつけたのである。彼の評判は否応なく高まらざるをえなかった。

その後のオーエンは、労働者にたいする積極的な社会改革を実施し、社

会的な名声をえていった。1825年に工場から手を引くまで、彼のおこなった改革の要点は、以下のとおりである。

①労働条件の改善（10歳以下の児童労働の禁止、賃金なしの徒弟児童の雇用禁止、労働時間の短縮、親方職工の職工殴打の禁止、職工の職務評価）、②生活環境の改善（協同組合の起源となるピレッジ・ストアの設置、病気基金積立制度の設立、無料診療の制度化、協同生活運動の推進、生活ルールの制定）、③児童労働者教育の実施（託児所、児童学校、勤労者全人教育の実施）に大別される⁽²⁾。

まず教育の面からみておこう。オーエンは、教育は、貧困や犯罪のない社会をつくる根本であるとの信念をもって、1809年に、幼児、児童、成人の教育を実現する壮大なプランをたてた。しかし共同経営者は、膨大な出費をとまなうこの構想に必ずしも好意を示さなかった。オーエンは、1813年に出資の5%の利益を要求するだけで、彼の構想に資金を使うことを心良く認めるロンドンの熱心なクエーカー教徒の新しい共同経営者を見つけ、彼のプランを実行していった。

こうしてすでに1809年に建設していたナーサリー・ビルディングにくわえ、1816年にインスティテュート、1817年にスクールを建設した。

彼の実施した教育は、ピレッジの子供が歩けるようになるとナーサリー（託児所）に入れることであった。そこで幼児たちは、2人の少女の世話をうけ、自由に遊んだり寝たりできた。これは、教育意識のない両親から子供を引き離すというオーエンの考え方によるものであり、また幼児をかかえる女性が職場に出られることを意味した。まさにこれは現代社会における職場の託児所の先駆的試みであった。

幼児学校（Infant School）は、3歳から6歳の児童がかよった。児童は、お互いに分かち合い、親切にすることを学んだ。

7歳から子供たちは、歴史、地理、自然誌、アート、音楽、ダンス、体操などを学んだ。音楽はカリキュラムのなかで重視され、芸術家、音楽家、ダンス教師が雇用されていた。オーエンは、子供が学習を楽しんでやれば、

褒賞や懲罰は必要ないと考えた。学校は朝7時30分から午後5時までであった。

1816年には生徒数274名、教師数は14名にもたった。教室は広々とし、壁紙はカラフルな動物画でいろどられ、児童には木綿のユニホームがあたえられた。児童たちは、自然散歩に出たり、見聞を広めるために支出をいとわずラナーク町まで催物の見学をしたりした。清潔を保つため、児童の入浴（インスティテュートの地下に入浴装置を設置）、散発も無料でおこなわれた。学校の正面には、プレイグラウンドがつくられていた。ピレージを清潔に保つ慣習を教えられた。

児童は、多くが10歳から仕事についたが、12歳まで学校に在学することができた。さらに誰でも出席できる夜学（evening classes）を開校し、講義がおこなわれた。

とくにオーエンのインスティテュート（正式にはNew Institution for the Formation of Character）における成人教育が注目された。オーエンは、よき環境がよき人格を形成し、現代的な表現をするならば、自由な

第4図 オーエンの建てた学校



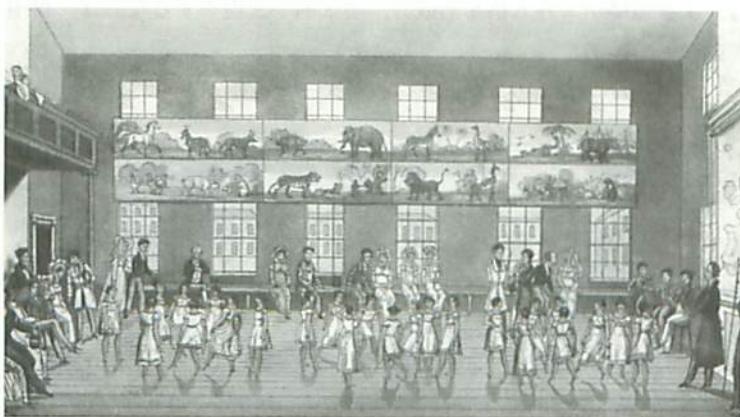
注：写真は、ニューラナーク保存トラスト編
The Story of Robert Owenからの転載。

第5図 修復されたインスティテュート



注：筆者による写真。1999年11月9日

第6図 インスティテュートのホールでダンスを楽しむ子供と見学者



注：写真は、ニューラナーク保存トラスト編
The Story of New Lanark からの転載。

レジャーが優れた人格を形成するという信念のもとに、労働者の社交性を培い、楽しみをあたえるために夜にコンサートや、ダンスの会や講演会を催した。図書室も設置され、そのために労働時間が短縮された。

労働条件の改善では、近代的な労務管理がほどこされた。日々の生産とコストの記録がとられ、とくに当時罰金システムなど一般的ななかで、「サイレント・モニター」システムの実施は注目された。監督が、労働者の働きぶりを評価して4色に彩られた木片（白・すばらしい、黄・大変良い、青・普通、黒・悪い）で評価し、機械の脇につるし、ノートに記入されていった。みんな白の評価をえようと頑張ったといわれている。

ビレッジの生活改善施策も注目された。オーエンは、賃金を高めることはしなかったが、住民の日常生活の改善に苦心し、会社直営の商店を設置し、安い価格で品質のよい商品を販売し、その利益は、彼の目指す労働者教育の費用を補助するために使われた。こうしてオーエンの直営商店は、協同組合運動の重要な先駆と見なされている⁽³⁾。

オーエンが、この村に経営者として最初に来た時は、たくさんの小売り商店が乱立していて、オーエンの言葉によれば「劣悪な商品にとんでもなく高い価格がつけられ、…すべての店でアルコール類を売り、肉屋の肉など皮や骨より悪いしろもの」を販売していた。多くの住民は、おもに掛け売りで商品を買ひ、多くの借金をかかえていた。

こうした問題を解決するためにオーエンは、ビレッジの中心に3階建の「ビレッジ・ストア」を設立し、あらゆる生活必需品から贅沢品、さらに良質のアルコール類まで供給した。オーエンは、工場経営者としての立場を利用して、卸売り市場で大量の商品を仕入れ、以前住民が小売業者に直接支払っていた価格の20%も安く販売した。その結果、住民の借金は、すぐに消え、小商店はすぐになくなってしまった⁽⁴⁾。

オーエンは、会社が雇用する優良な医者⁽⁵⁾の無料診療制度をしき、賃金の60分の1を拠出させて病気基金（sick fund）を設置し、労働者が病気で働けなくなった時に引き出せるように備えさせた。懸命な家計運営を奨励し、貯蓄を奨励した。「当時のニューラナークを訪れたロバート・サウシーの証言によれば、労働者には、1週16シリングまでの信用買いが認められ、もしのぞめば他所の場所でも買物ができ、労働者の家族は、1週1家

族2ポンドの総収入から10シリング近く貯金ができたと、したがって彼らは、よそへはいかなかった。」⁽⁵⁾。

オーエンは、労働者に生活ルール18ヶ条を作成し、ビレッジの生活秩序をまもることを教えた。そのルールとは、各人の家は、週に一度掃除して、窓、家の外と内、階段などを清潔に保たなければならない。窓から水、ごみなどを投げすてたり、家の脇に放置したりしない。ごみは近くのごみ捨て場にすてなければならない。住人は、自分の家の通りを清潔にしなければならない。家の中で牛、ブタ、鶏、犬を飼ってはいけない。両親は、子供の行動に責任をもたなければならない。誰も垣根や木々、他人の財産を損傷してはいけない。人々は宗教について口論せず、誰もが自分の意見をもつことができる。大人で働ける人は、何か役立つ正当なことをなすべきである⁽⁶⁾。

これらは、今日では当たり前のモラルであるが、当時では無知、不道德、野蛮な労働者が多かったなかで、労働者がまもるべき先進的なモラルを示すものであった。

オーエンは、また住民議会（community council）を組織し、オーエンの思想の浸透をはかると同時に労働者自身による自助自決の慣習を実践させた。ビレッジは、「隣組」（neighbour divisions）に分けられ、家長の集会が開かれ、「プリンシパル」（principal）とよばれる彼らの代表を選出した。すべての「隣組」の代表が集まって、12名の「ジュリーメン」（jurymen）とよばれる委員を選出した。委員会は、月1回開かれ、ビレッジの改善を論議したり、ビレッジ内の紛争やルール違反者をさばき、困った人たちを助けた⁽⁷⁾。

ニューラナークのモデル・ビレッジとしての評判は、国の内外に響きわたり、1815年から25年までの10年間に2万人が見学に訪れたといわれている。

オーエンは、ビレッジでの実験を背景に、多数の著作を発表し、社会改革者として名声をえ、労働条件の改善を法制化する1819年の工場法制定

に大きな役割をはたした。さらにその後社会改革運動を展開した。1821年にオーエンは、ニューラナークの実験をさらに思想化して、「相互援助と協働の組織、いいかえれば平等な労働と平等な分配からなる共同体」^⑧の建設を計画したが、一般の社会では支持されず、とくに宗教への批判的な立場は彼の評判を落とした。

1825年オーエンは、ニューラナークを協同経営者の息子に手渡し、1824年にアメリカのインディアナ州「ハーモニー」とよばれる共産社会的な集団生活をいとなむ地域を3万ポンドで購入し、自ら理想とする社会の実現をめざした。しかし多くの社会改革の種をまいたが、3年間で実験は失敗し、オーエンは、イギリスに帰国し、社会改革運動に専念した。彼は、1859年に没したが、その間いわゆるオーエン主義者を生み出し、労働組合運動、チャーチスト運動、協同組合運動、非共産主義的社会主义運動などに絶大な影響をあたえた。

しかしニューラナークは、次第に忘れられ、建物とビレッジは19世紀末に繊維会社に引き取られ、戦後まではそばそと生き延びた。

- (1) ロバート・オーエンについては、おもに前掲の Ian Donnachie and George Hewitt, HISTORIC NEW LANARK, Chapter 4, New Lanark Conservation Trust 編の, THE STORY OF NEW LANARKS, THE STORY OF ROBERT OWEN, 1997, Mr. OWEN' MODEL VILLAGE, NEW LANARK VILLAGE STORE, 1993, などを参照。

なおオーエンにかんする専門的な研究については、オーエンの著作を参照されたい。

- (2) これまでマルクス主義型の共産主義が評価されて、実際におこなわれたオーエンの改良主義的社会主义の実験は、むしろ空想的なものとして低く評価されてきた。とくにマルクス主義の優勢だった日本のような国ではそうだった。資本主義を一挙に廃止しようとするマルクス主義的共産主義が崩壊してしまつた今日、資本主義の一挙的転覆ではなく、資本主義社会の枠組の中で、ぎりぎりの改革をおこなつたオーエンの業績を改めて評価する時代がきている。
- (3) 協同組合運動は、ニューラナークのストアの経験をもとに、1830年代からオーエン主義者によって、各地で展開されるようになる。

- (4) ニューラナーク工場の賃金は、とくに高くはなかった。同時代人のエドワード・ペインによれば、1820年頃、18歳以上の男性の賃金は、週10シリング以下であったが、出来高制の場合は15シリング稼いだ。女性は、個定給で6シリング、出来高制で8シリング稼いだ。18歳以下の労働者は、それより低かった。ペインによれば、これらの賃金水準は、当時のリーズの賃金と比べて決してよくはなかった。

しかしケント公の侍従医ヘンリー・マクナブ (Henry McNab) は、1819年にニューラナークを訪れ、「施設で買ったビーフをもった婦人にあつて、その肉は1パウンドあたり7ペンスで、グラスゴーで買えば10ペンス以下では買えないだろう、という話を聞いた」と書いている (NEW LANARK VILLAGE STORE, p.3)。しかしニューラナークの労働者は、短い労働時間、無料の医療サービス、無料の幼児教育、「ビレッジストア」などの福利厚生をえていたのである。(同上)

- (5) 同上書, p.3.
 (6) ニューラナーク保存トラスト発行の資料による。
 (7) 同上。
 (8) 前掲ベア『イギリス社会主義史(二)』, 35頁。

2. 「ニューラナーク」の保存運動

以上簡単にニューラナークの形成事情をみてきたが、ニューラナークは、産業史、労資関係史、社会運動史、教育文化史、建築史、などあらゆる分野からきわめて歴史的な意義の深いものであったことがわかる。このニューラナークは、戦後1960年代になって荒廃しはじめたが、それを保存しようとする運動がおきてきた。この運動は、大別して四つの時期にわけられる。

第1の時期は、1960年代であり、ニューラナークがローブ製造工場の経営のもとで衰退し、急速に荒廃していくなかで、おもに工場経営者と1963年に設立された住宅組合であるニューラナーク協会 (New Lanark Association) による主としてビレッジの住宅の修復・保存運動が細々とおこなわれた時期である。

第2期は、1972年から80年代初めまでの時期で、ロープ製造会社のニューラナーク工場が1968年に閉鎖され、1970年に産業廃棄物処理業者へ転売され、ニューラナークの荒廃が急進展していくなかで、1972年に自治体のラナーク町とスコットランド・シビック・トラスト（Scottish Civic Trust）によるニューラナークを保存するための会議が開かれ、保護計画を作成し、1974年にニューラナーク保存トラスト（New Lanark Conservation Trust）が設立されて、積極的な保存運動を展開した時期である。

第3の時期は、保存運動が困難に遭遇しつつも、1983年にニューラナークの保存運動を観光事業と結びつける方針をさだめ、1986年から3年間にわたるビジターセンター設立プロジェクトをスタートさせ、本格的な保存・修復運動を軌道にのせた時期である。

第4の時期は、1990年のビジターセンターの開館から今日にいたる時期で、ニューラナークの観光化が成功をおさめ、さらにニューラナーク保存トラストの新しい方針のもとに、ニューラナークの観光化と保存・修復を一応完成させていく時期である。

この保存運動は決して平坦な道ではなく、それ故にわれわれにとっても学ぶべき点が少なくない。以下簡単にニューラナークの保存運動をあとづけ、その問題点を解明しておきたい¹⁾。

- (1) ニューラナークの保存運動については、前掲の Ian Donnachie らの HISTORIC NEW LANARK, Chapter 9, George Hewitt, THE STORY OF NEW LANARKS, Section 7, その他、ニューラナーク保存トラストの内部資料によった。なお本節の保存運動については、逐一引用頁は示さなかったが、とくに重要な事項については、引用頁を示した。

(1) 1960年代「ニューラナーク」の荒廃と保存運動の開始

19世紀末以来、「ニューラナーク」を買い取って経営していたロープ製造会社（Gourock Ropework Company）は、歴史的遺蹟としてのニュー

ラナークの価値をまったく無視していたわけではなかった。工場や機械は、1950年代に補修され維持されていたが、ビレッジの住宅部門は、時代遅れとなり、そのまま放置され、荒廃がすすんでおり、会社にとっては、その維持管理が頭痛の種であった。

あくまで企業としての立場にたつ会社は、独自の住宅改善をおこなうことができず、工場の責任者イングリス (G.H. Inglis) の心配にもかかわらず、住宅は荒廃し、60年代には、スコットランドの行政当局により、劣悪な住宅の改善命令をうけ、地下住宅の閉鎖が命じられるまでにいたった。

こうしてロープ製造会社は、工場群とはべつにビレッジの住宅部門を自分で改善することができず、ラナーク町の自治体に250ポンドで提供することにした。これを引き取った自治体は、ビレッジの歴史的な価値を充分認識して、ビレッジを放置して崩壊させることを認めがたかったが、住宅の大幅な改善には25万ポンド(当時の平価1ポンド約1000円で評価すれば、2億5000万円)ほどの費用がかかると算定され、苦しい立場にたたされていた。

1962年のラナーク町の議会は、膨大な資金を必要とする住宅改善は自治体にとって荷が重すぎると、わずかに過半数をこえる議員の反対で改善提案を否決してしまった。しかし他方で町議会は、ビレッジの救済をもとめる決議をおこなった。

こうした事態は、むしろ社会的な関心を呼び起こした。一つは、スコットランド国務大臣マックレイ (J. S. Maclay) とスコットランド行政府やスコットランド特別ハウジング協会 (Scottish Special Housing Association) の役員、地方議員ハート女史 (J. Hart) などの個人の関心を呼び起こした。

他方、スコットランドの地方紙『スコッツマン』は、ビレッジの救済案として大学の設置を提案する投書を掲載した。この提案は、リベラルアーツ・コレッジかDIY (Do it yourself) の原理にもとづき、平和と協同組

合のための新しい大学を設立してはどうか、ニューラナークの住宅は、外国人学生用の住宅にし、とくに将来海外でボランティア活動をする学生に貸すべきだという提案であった。この興味深い個人的な提案は、採用されなかったが、ビレッジ問題の関心を高めるのに大いに役立った。

ラナーク町議会の決議にこたえて、民間のアダム・ハウジング協会 (Adam Housing Society Ltd.) が、ビレッジの何らかの救済に乗り出すことに賛同した。こうして1963年6月19日に、ニューラナークにおいてニューラナークの保存・保護に関心をもつグループによる会議が開かれた。

この会義に集まったおもな団体は、スコットランド行政府、ラナーク町その他の地域自治体、ローブ製造会社、ハウジング協会などであった。とくにハウジング協会からは、初期の復興運動の中心的人物であったエジンバラ大学建築学部のノーマン・ダンヒル (Norman Dunhill) が代表として出席していた。

ダンヒルは、もし積極的に資金を集めて、賃貸住宅を近代的な住宅に改修するならば、この歴史的なビレッジを保存できると楽観的な意見をもっていた。新聞の報道によれば、そのために要する費用は34万ポンドであった。

1963年12月21日に、ニューラナークを住宅の保存を目的とするニューラナーク協会 (New Lanark Association) の創設会義がグラスゴーで開かれた。この協会の設立は、ニューラナークの保存運動の新たな方向を示すものであった。

ダンヒルは、同年12月19日にロバート・オーエンの子孫であるケネス・デール・オーエン (Kenneth Dale Owen) をアメリカから招き、ニューラナーク保存運動とニューラナーク協会の設立を盛り上げた。

ケネス・デール・オーエンは、テキサスのビジネスマンであったが、ロバート・オーエンが、アメリカで実験したニューハーモニー・ビレッジを設立して、アメリカにのこしてきた直系子孫の一人であった。

ニューラナーク協会には、ケネス・デール・オーエンをはじめ、イギリ

スの国会議員となったハート女史、ロバート・オーエンの研究家コール女史 (Margaret Cole) なども参加した。

協会は、ニューラナークの歴史的な住宅を保存のために「パイロット・プロジェクト」を組織し、建築家のリンゼイ (I. G. Lindsay) と彼の同僚達が歴史的な建築物の修復計画を立案した。そしてこの計画にもとづいて、協会は、ラナーク町当局から10数万ポンドを借入して、自治体の所有となっていたケネス・ロー棟の25戸とナーサリー棟の修復をおこなった。これは、後には無謀な計画であると見なされたが、大胆なところみではあった。

この修復工事は、多くの困難をともしつつも、1966年12月に終り、新しく修復された集合住宅のこけら落しの儀式が、ケネス・デール・オーエンと彼の娘キャロラインを迎えておこなわれた。

この修復事業は成功したが、遺蹟保存問題はさらに深刻となった。1966年4月21日の大新聞『ガーディアン』のレポートによれば、ロープ製造会社は、4分の3しか工場で働いていない住民の家賃が週5~6シリングで、年に4000ポンドもの補助金を支出し、工場の近代化のために25万ポンドを支出することを決定しが、歴史的な産業遺産であるニューラナークの存在をもてあましているようであると報じた。

全工場のフロアーは、5分の3しか有効に使用されていず、機械の500ポンドをべつにして工場の販売価格は2万5000ポンド程度と評価された。しかし実際に工場を販売するとすればもっと安くなることは明らかだった。ロープ製造会社にとって、ニューラナークは、もはや完全に重荷であった。

こうした事情のなかで、ニューラナーク協会は、1967年にもし民間レベルで20万ポンドを集めることができれば、最近の評価で総額50万ポンド近くの助成金を各種の基金からえられるだろうと予想した。

協会のアピールに、代表者として署名したクライズミアー卿 (Clydesmuir) は、これらの資金は、みんなの同意をえて、住民の住宅のために支出されるだろうと述べ、資金が単に遺蹟的建物の保存のためにだ

けに支出されるものでないことを表明した。こうして放置しておけばスラム化しかねない歴史的な住宅を近代化するというニューラナークの住宅建造物問題は、ロープ製造会社の予期せぬ合理化のための工場閉鎖によって、一挙に危機的な状況に追い込まれた。

ニューラナークは、産業革命の時代には、立地が最適であったが、20世紀の新しい産業にとっては、むしろ交通アクセスは悪く、その伝統的な古い構造物は役にたたず、新しい産業のために買い手を見つけることができなかった。結局、1970年に工場の建物は、産業廃棄物処理業者に売却されることになった。それによって、しばらくの間、地域に20数人かの雇用が創出されることになったが。

(2) 1972～83年「ニューラナーク」保存運動の活発化

1968年のニューラナーク工場の閉鎖は、保存運動に大きなショックをあたえた。産廃業者のもとで、ニューラナークの工場群は使用されずに放置され、醜い金属スクラップの山と廃棄自動車が工場周辺に放棄され、ニューラナークの地域環境は一挙に悪化した。工場の建物も急に劣化しはじめ、学校棟の屋根は、3分の1が崩落してしまった。工場閉鎖のために、ビレッジの人口は、1968年の300人から1970年初めまでに80人に減少し、ビレッジの衰退と住居の荒廃は進行した。

ニューラナーク協会による住宅修復計画は、修復費が膨大となり、ハウジング協会への負債は利子込みで15万ポンドにもたっし、ラナークの行政当局も、苦境にたたされた。ニューラナーク保存運動は、これまでのような部分的な手直しをおこなう保存計画では間に合わず、また資金的にも一団体では背負いきれないことが認識され、全面的な保存計画の再検討の必要にせまられた。

こうして1972年に新たな保存運動を展開するために、スコットランド・シビック・トラストとラナーク行政当局は、関係団体をラナークの1ホテルに集めて会義を開き、新たな対応策を協議した。ラナークの町長スミス

(Harry Smith) が議長となり、作業委員会が組織されて、1973年に「ニューラナークの将来」(A Future for New Lanark) と題する報告書をまとめ、新たな保存運動の方針を提起した。

ちょうどその頃、1873年にニューラナークは、スコットランド当局から、重要保存地域(Outstanding Conservation Area)の指定をうけ、また翌年には、ニューラナークの全建造物が、A級の歴史的建造物(historic building Grade "A")として指定され、保存運動に拍車がかかった。

会議の結果、第1に、1974年に保存運動に専念する専従マネージャー・アーノルド(Jim Arnold)が、スコットランド歴史的建造物カOUNシル(Historic Buildings Council for Scotland)とストラスクライド地域自治体(Strathclyde Regional Council)、ラナーク町(後にClydesdale District Council)の共同負担で雇用されることになった。アーノルドは、産業界の職業再教育の経験をもっており、中央政府の労働行政機関(Manpower Services Commission、後にTraining Agency)からの支援を引き出す仲介役となり、その後の保存運動にとって重要な役割をはたすことになる。

第2に、ニューラナーク協会とはべつに、新たに慈善団体とアメニティ団体として公認されたニューラナーク保存トラスト(正式には、New Lanark Conservation and Civic Trust)を設立して、これまで住宅の保存にかぎらず、ニューラナーク全体の保存運動を展開することを決定した。

保存に関連する一連の政府関係団体や民間団体が集まり、管理委員会が組織された。しかし当初保存トラストは、独自に保存活動を展開することはできず、中央、地方政府の財政支援をうけて、関係団体を統合し、保存活動をすすめるための推進役をはたすにとどまった。

保存トラストの最初の大きな事業はいくつかあったが、その一つは、建物の補修方式に新しい方式を導入したことである。ハウジング協会から住居修復のための基金が縮小されていたおり、アーノルドらは、すでにスコッ

トランド・ナショナル・トラストで実験ずみの「購入者による住居修復計画」という大胆な方法を採用した。これは、1975年に自治体の所有していたブラックス・ロー棟の住宅を売却し、その購入者が、各種の団体から補助金をえて厳しいガイドラインを守りながら住居を保存するという方式であった。

もう一つは、中央政府の労働行政機関（Manpower Services Commission）から、住居の外壁部を修復する作業をおこなう労働者の雇用や養成に資金が提供されるようになったことである。また修復に必要な石、スレート、屋根や床などの木材は、スコットランド歴史的建造物カウンスルと地方自治体の共同により供給されたことであった。

住宅の外壁部の修復が終ると、今度はハウジング協会から、資金的支援をうけて、住宅の内部の修復がおこなわれるようになった。

こうしてビレッジの居住者住宅の修復が再び可能となり、33戸が修復され、さらに10戸が修復を予定された。またその後の10年間もふくめ、ブラックスフィールド・ロー棟とロング・ロー棟の20戸の購入者修復計画が終了し、さらに11戸の修復が計画された。

またダブル・ロー棟の一番端の住宅は、「展示用」として、スコットランド開発局の歴史的建物記念物部（Historic Buildings and Monuments Directorate）の特別な配慮により設立時の状態に修復された。

1970年代末までに、ビレッジのおもな住宅の修復が基本的に終了した。こうしてニューラナークのビレッジの住居修復問題から急速に崩壊しつつある歴史的な工場群の保存問題に関心が移っていった。

もっともひどい状態にあったのは学校棟で、屋根の3分の1が崩落して、建物内部も多くが壊れてしまっていた。1974年に、自治体は、学校棟とその隣りにあった機械工作場と染色工場の建物を産廃業者から買い上げ、スコットランド開発部の管理のもとに、まず学校棟の修復をはじめた。また1978年には、ロバート・オーエンとデービット・デールが住んでいた二つの住居が、ハウジング協会によって産廃業者から買い取られた。しか

第7図 半壊する学校



注：写真は、ニューラナーク保存トラスト編
The Story of New Lanark からの転載。

しインスティテュート棟と三つの工場棟は、産廃業者によって相変わらず所有されたままで、荒廃がつづいていた。自治体は、1979年に産廃業者にそれらの改修を命じたが、問題は解決しなかった。

(3) 1983～90年「ニューラナーク」保存運動の展開と観光資源化

1983年1月10日にスコットランド国務大臣ヤンガー（George Younger）は、声明を発表し「ニューラナークのための新政策」（New Deal for New Lanark）を打ち出した。自治体は、建築物の再生への関心が広範に広まれば、公的資金以外に財政的な支援がえられると期待した。

こうして1983年にこれまで産廃業者の所有であった建物は、スコットランドでは初めての事例であったが、歴史的な建物を保護する手段として法律に訴え、ナショナル・ヘリテージ記念物基金（National Heritage Memorial Fund）の資金を使って強制的に買収された。そして、1983年に三つの工場棟とインスティテュート棟は、ニューラナーク保存トラストに譲渡された。

工場とインスティテュートの保存修復事業は、ニューラナーク保存トラストによる新しい方針のもとで計画された。それは、従来の方針と異なり、単に建物を保存するだけでなく、工場やインスティテュートなどのこりの建物、設備を観光客に解放し、観光資源として機能させ、地域経済の活性化に貢献しつつ、保存修復を実現し、そこからえられる収益をさらに保存事業にまわし、ニューラナーク保存トラストを維持しつつ、記念すべき建造物とロバート・オーエンの業績を顕彰していこうということであった。

具体的には、まずビジターセンターとよばれる観光施設をつくる下準備として、1984～85年の2年間に、イギリス政府の労働行政機関であるマンパワー・サービス・コミッションが、ビル修復作業、環境保全、研究調査などのために200名以上の要員を採用して、支援した。

スコットランド開発機構 (Scottish Development Agency, 後の Scottish Enterprise) は、工場周辺に放棄されていた金属廃棄物を清掃する環境修復計画の一部を負担した。スコットランド観光局 (Scottish Tourist Authority) はビレッジの近くの駐車場とピクニック施設の開設のために基金を提供した。スコットランド・カントリーサイド・コミッション (Countryside Commission for Scotland) は、1984年にスコットランド・ワイルドライフ・トラスト (Scottish Wildlife Trust) が、工場施設の南部にある染色工場棟の一部にビジターセンターを開設するのを支援した。

1986年にニューラナークは、ユネスコの世界遺産 (UNESCO World Heritage Site) として登録された。こうした状況にうながされ、1989年の開館を目標に、1986年から89年まで、インスティテュート、エンジンハウス、第3ミルを修復・改修してビジター・センターとして開設する3年間プロジェクトが実施された。そのために、後に詳しくみるように140万ポンド近くの、政府資金を中心とした助成金が集められて投資された。

こうして1世紀以上も荒れ果てていた周辺の森林と森の中の道がきれいに整備され、すばらしい眺望が復活した。こうして長い間好奇の目でみられていたニューラナークは、ついに有力な観光地としてよみがえっていった。

(4) 1990年～現在「ニューラナーク」保存運動の継続と観光事業の展開

1980年代末までにニューラナークの工場群とビレッジ内の主要な建物は、修復されほぼ復活した。ビジター・センターも完成して、1990年12月14日に、公式にビジターセンターが開館し、ニューラナークは、紋切り型の博物館ではなく、エンターテイメントと教育、研究を総合した新しい歴史的建築物遺蹟博物館⁽¹⁾として観光資源となった。

開館当初、10万人程度にとどまっていたビジターセンターへの入場者は、1994、5年には14、5万人近くとなり、またニューラナークを訪れるビジターは、1990年には15万人であったが、その後1994、5年には35万前後に増加した。ニューラナークは、今やスコットランドのもっとも有力な観光スポットとして注目されるようになった。

ニューラナーク保存トラストは、1990年のビジターセンター開設以後もたゆまぬ努力をつづけた。1990年にスコットランド開発機構(SDA)に依頼されたコンサルタント・マクリントック(Peat Marwick McLintock)は、ニューラナークの一層の保存と観光化の開発戦略についての「マスタープラン」を提出した。このレポートの要点は、以下のとおりである。

保存トラストは引き続きビレッジの歴史的建物の修復・復活をおこなうことを基本方針とし、①年間ビジター数を10万人から5年間で40万人に増加させる。②ビレッジ内の雇用を現在の150名から300名程度に増加させる。③ニューラナークを経済的にささえるために、ニューラナークのブランドをつけた商品、工芸品を開発し販売する。④ニューラナークの観光事業をいっそう発展させるため、第1ミルを高級ホテルに、ウィー・ロー棟をユースホステルに、ウォーターハウスをセルフケイタリング・ロッジ(自炊のできる宿泊施設)に改修する。このホテルは、ニューラナークのホテルらしく、「トレーニング」ホテルともよばれ、ホテル学を学ぶ学生たちの研修を引き受けるというユニークな機能を持ち、常時100名程度の

学生を収容する⁽²⁾。⑤さらに現行のビジターセンターの充実をはかり、新たにワイルドライフセンターを設置する。

レポートは、これらの実施には780万ポンドの資金が必要と推定したが、ニューラナーク保存トラストは、マーケティング調査をおこない、周到的な資金調達につとめ、この提案を実施していった。

その結果、1993年にはビレッジ・ストアーが修復されて、古いスタイルのショップとして開店し、第4ミル跡の水車構を修復して水車を復元し、エンジン・ハウスにスチームエンジンを復活させた。1994年には、労働者住宅のニュービルディングが修復され、一般住宅であったウィー・ロー棟が62ベットをもつユースホステルとして開館した。1995年には、駐車場の拡大がおこなわれ、ビジターセンターへの通路に照明がつけられ、またロバート・オーエン・ハウスが開館された。これら修復された建物、復活した施設はビジターセンター内の施設とされた。これらに要した資金は、後に詳しくみるように、おもにラナークシャー開発機構、ヨーロッパ地域開発基金から支給された。

1996年には、ロバート・オーエンの学校棟が修復された。1998年には、40室、80ベッド数をもつ第1ミルのホテルが開館した。8戸のセルフケイタリング・ロッジがオープンした。この他、「アニー・マクロードの体験」コーナーの施設が7万ポンドの補助金によっていっそう完備された⁽²⁾。

こうしてニューラナークは、ビジターセンターを中心にした観光地として成功をおさめていった。

- (1) ニューラナーク保存トラストの文書では、ニューラナークの博物館化という表現、あるいは観光化という表現は、ほとんどない。後にみるように、ニューラナーク保存トラストは、むしろ博物館ではなく、あくまで「ビジターセンター」という表現を固執して、ニューラナークを、そこに人々が生活し、働き、歴史的建物を保存し、オーエンの歴史的業績をつたえ、楽しみと教育をかねたヘリテージ（遺産）として強調している。しかし私は、あえてビジターセンターの事業を観光、観光を内包した新しい型の博物館として把握してい

る。と同時にそうした把握の背後に、観光、レジャーが文化的かつ人間的に質の高い側面をもつものと評価する新しい概念があると指摘しておきたい。

抽稿「現代レジャーの概念について」「現代レジャー論の研究対象」ともに『経済志林』第65巻第4号、第66巻第1号、参照。

- (2) 以上に関する資料は、ニューラナーク保存トラストが発行している各種の教員用や学生用の教材資料による。

4. 観光事業としての「ニューラナーク」

(1) 観光事業の概要

これまで簡単にニューラナークの保存運動をみてきたが、ここでは、ニューラナーク保存トラスト（以後NLCトラストあるいはトラストと略す）の組織とトラストのおこなう観光事業の概要をみておきたい。

まず観光事業の主体であるNLCトラストの組織についてみると、トラストは、1974年に設立されてニューラナークの保存活動をおこなってきたが、当初は、ラナーク町長ヘンリー・スマイスと専任職員として迎えられたジム・アーノルドを軸に保存運動の調整機関として機能していたにすぎなかった。

NLCトラストが独自の運動を展開するようになるのは、1983年にニューラナークの保存を観光事業と併行して推進するという新しい方針が提起されてからである。アーノルドは、後に表彰されているように、NLCトラストの真の貢献者であり、保存運動を観光事業と併行しておこなう戦略を成功裏に導いた有能な指導者であった。

NLCトラストの目的と観光事業について、トラストの1スタッフは、つぎのように述べている。トラストは「ビレッジの住宅の所有者のニューラナーク協会とともに、政府に公認された慈善団体として、スコットランド政府によってA級の歴史的建築物と評価された建築物を長期的に維持する責任をもつものであり、NLCトラストの目的とするところは、単な

るミュージアムとしてではなく、新しい雇用機会をつくりつつ、そこに住む住民とともに、現実にビレッジとして機能しつつあるニューラナークを維持することである。」そして「ニューラナークの戦略は、もはや紡績業で生きるのではなく、おもにビジターセンターの出し物 (attraction) によってビレッジの経済を多様化し、ビレッジの発展をはかることである」。さらにトラストは「ニューラナークを教育素材として利用する政策をとる」と強調し、また決して営利団体ではなく、観光事業からの収益を、ニューラナークの保存のために使うと強調している¹⁾。

NLCトラストは、ボランティアの12名の理事からなる理事会 (Board of Trustees) によって管理運営された。理事会は、トラストの目的を推進し、トラストの理事長、ビレッジ経営者などトラストの役員を決定した。トラストの執行委員会 (Executive Committee) は、トラスト内の役員によって運営され、理事会にたいして責任を負っていた。トラストの理事会には、トラスト運動にかかわる自治体や民間の団体、個人などの代表が参加している。理事の任期は3年で再選が認められた。トラストの理事長 (Director) は、ニューラナーク協会副事務局長を兼任した。

トラストは、1986年にはビジターセンターを設立して、観光事業を開始し、1989年には観光事業を実際におこなうためのニューラナーク商事 (New Lanark Trading Ltd.) と施設内の修復管理と作業トレーニングをおこなうニューラナーク企業研修社 (New Lanark Enterprise Trainig Ltd.) をトラストの附属機関として設立した。また1998年には、ビレッジ内のホテル経営のために後者を吸収してニューラナーク・ホテル会社 (New Lanark Hotels Ltd.) が組織された。これらの組織は、その利益をトラストの目的のために提供するものとされた。

1990年頃のトラストの組織には、5人の専従がおかれていた。アーノルド理事長のほか、開発、教育、管理、庶務のスタッフ4名、合計5名であった。その他、ビレッジ内の住宅を管理するニューラナーク協会から事務員1名が出向していた。

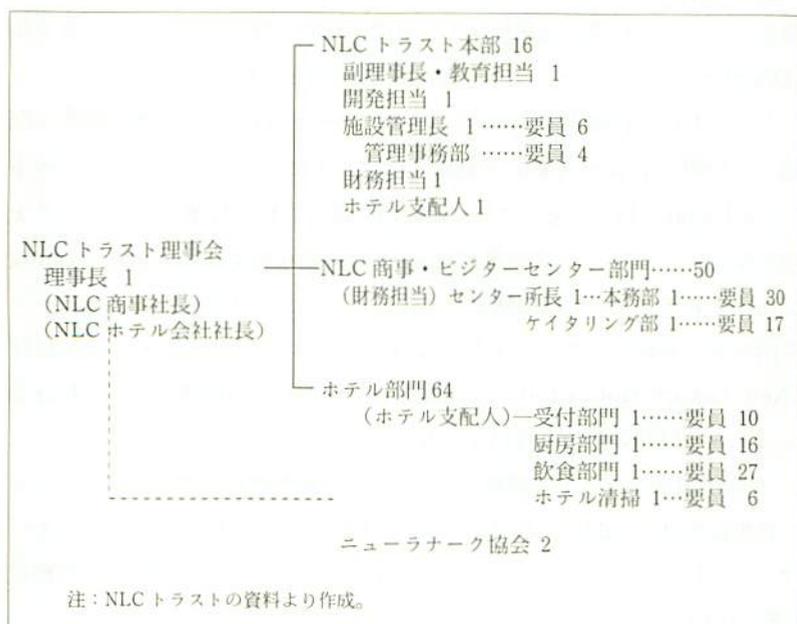
トラストの観光事業であるビジターセンターの業務を担当するニューラナーク商事には、管理職3名、パートタイマー・経理1名、ビジターセンター係員としてフルタイム6名、パート26名、営業2名を擁していた。また施設内の作業・管理と職業教育をおこなうために管理職2名、作業員2名がおかれていた⁽²⁾。

その後トラストの組織は発展し、1999年9月現在には、トラストの構成は、第8図に示したとおりである。ジム・アーノルドが、トラストの理事長をつづけており、ニューラナーク商事、ニューラナーク・ホテル会社の経営責任者を兼任していた。そしてトラストの生みの親ともいふべきニューラナーク協会が併存していた。

トラストに直接かかわるスタッフは、理事長以下5名の幹部スタッフがおかれ、副理事長を兼任する教育担当、開発担当など2名のほか、ビジター

第8図 ニューラナーク保存トラスト関連組織図

(単位：人数)



センター部門とホテル部門の責任者として働いていた。

トラスト本来の保存活動をおこなうトラスト独自のスタッフは、さきの5名のほか、施設管理をおこなう部門に管理職1名と要員6名、さらにトラスト組織の管理部門として4名が財務担当のもとに配置されていた。

財務担当スタッフは、ビジターセンターを統括し、その下にビジターセンター所長がおかれ、ケイタリング部門の管理職1名と30名の要員、本務部門に管理職1名と17名の要員、合計50名が働いていた。

今やトラストの観光部門の中心事業として1998年3月14日ロバート・オーエンの誕生日にオープンした第1ミルホテル部門は、奇しくもオーエンという名のホテル支配人のもとに、4名の管理職と、レセプション部門10名、レストランの厨房部門16名、飲食部門27名、ホテル内清掃部門6名が雇用されている。ホテル部門には、総勢61名が働いている。こうして一挙に観光部門の要員が倍増した。

こうしてニューラナークは、トラストを中心にして総勢132名のフルタイム要員（パートは除かれている）によって運営されている。

つぎにニューラナークの観光事業の概要を明らかにしておこう。いうまでもなくNLCトラストが、長い間努力してビジターに公開しようとしてきたものは、産業革命期のニューラナークにおける紡績工場の姿であり、建物だけでなく、そこで働いていた労働者たちの生活であり、すぐれた経営者であり、社会改革者のロバート・オーエンの歴史的な業績である。それらは、二つの部分からなっている。

一つは、観光事業として入場料をとってみせるビジターセンターの施設である。もう一つは、ビジターセンターの施設以外に、ビジターが自由に利用することができる、ビレッジ内の建物、施設、環境などである。ビジターは、ややはなれた無料の駐車場から、ビレッジの中心にありニューラナークの顔ともいべき3階建のインスティテュート棟に行く。1階は、ビジターセンターの受付と多目的ホールがある。上階は、コミュニティー・ホールと各種の会議場になっている。受付で入場料を支払ってセンターに

入る。ちなみに入場料は、第3表のとおりである。

受付からインスティテュート棟建設後に併設されたエンジン室に入ると、水車動力がすたれた後の1881年に工場の動力として設置された蒸気エンジン（現物は消失したため、その後に設置されたエンジン）が修復され配置されている。これは産業史的にみて貴重な遺産である。ここから第3ミルへの通路がある。

6階からなる第3ミルは、ビジターセンターの中心であるが、エンジンハウスからつながっているアクセスホールは、各階へつながっており、またビジターが工場建物の構造を観察できるように一部の床を取り除いてあり、そこで初期の紡績工場の耐火用煉瓦造天井と鉄骨枠組みがみえるように工夫されている。

第3ミルは、最上階が事務室にあてられ、5階がオーディオビジュアル施設で、4階はいまだ稼動している織物機械が展示されている。3階はセンターのメイン出し物と150席ほどのカフェテリア、2階は学生生徒たちの集会室、1階が倉庫となっている。

センターの出し物のメインとなっている「アニー・マクロードの体験」は、1990年12月のクリスマス特別企画からはじまったのであるが、ヨーク市にあるバイキングミュージアムの仕組みと同じように、マルチメディアを駆使し、前面が開かれている2人乗りのカプセルに乗って、ほぼ12分間にわたって1820年頃のニューラナークを、立体画像にあらわれる10

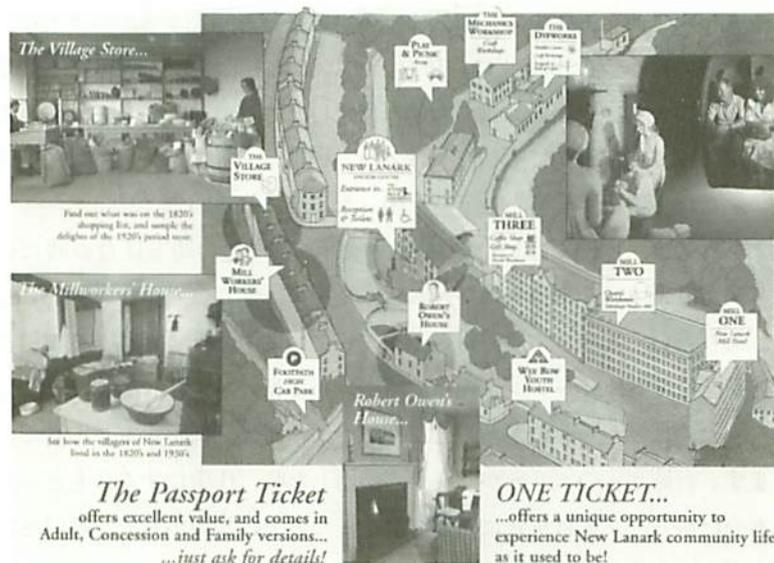
第3表 ビジターセンターの入場料

(単位ポンド)

	大人	子供, シニア
1986	0.50	0.20
1990	1.50	1.00
1992	2.45	1.60
1999	3.75	2.50

注 NLCトラストの資料から作成。

第9図 ニューラナークの観光施設概観図



歳の紡績女工アニー・マクロードの幽霊が案内役になって、紹介される仕掛けになっている。

博愛的なロバート・オーエンの経営するニューラナークの典型的な1日が最新の技術を使って示される。ビジターは、工場の労働者や2軒の家族に出会い、学校の教室内やビレッジで遊ぶ子供、休息している人々に出会ったり、オーエンの演説も聞ける。こうした企画は、これまでの博物館にない企画として年齢をこえて好評を博し、観光業界やマスコミからも高く評価されている。ナレーションには日本語バージョンもあって、1992年に訪れた時、筆者も中身の水準の高さに感心したことを記しておきたい。

ちなみに紡績女工の少女アニー・マクロードの語りを紹介しておこう*。

*アニー・マクロードのナレーション。

「私はアニー・マクロードと言います。昔のニューラナークの世界へようこそ。あなたは、幽霊を信じますか。私たちが見えないでしょう。

でも私たちは、ここにいるのよ。私の物語ですって？ 私は、1810年にニューラナークで生まれて、死んだのが…（昔を回想するかのよう、間をおいて）…。1820年に、10歳です。私は、工場で紡績女工として働いています。工場は、働くためには悪いところではないって、お母さんが言っているわ。でも気をつけてね、機械は、誰にも止められないのよ。だから事故が起きたり、時々困ったことになるわ。

私たちは、1日に10時間30分働きます。朝ご飯の時と昼食の時に休みがあります。仕事はきついけれど、オーエンさんはとてもやさし人で、誰よりもいい人だって、お母さんが言っています。たとえ私たちの働き方が悪くても、オーエンさんは、冷たい目で私たちをみるだけですもの。

私たちは、もしお金がもらえなくてもよければ、結婚することもできます。お姉さんのエリザがジョンと結婚した時、仕事にすぐにもどったものだから、二人は正式に結婚しなかったのではないかって、陰口をいう人もいたわ。

私は（…咳をする）、綿ぼこりが嫌いです。それが髪の毛や着る物につくと、みんな雪だるまみたいに真っ白になってしまうわ。目も痛くなるし。オーエンさんは、外に出掛けたりしない時は、毎日工場の中を見回りに来ますが、時々自分の子供を連れてくる時もあります。工場の中では、オーエンさんは、ほとんど一言も話しません。ただ私たちを見て、それから私たちの後ろにかけてある「サイレント・モニター」を見るだけです。それって、四角い木で出来たもので、それぞれの面に四つの色がついていて、私たちがどう働いたかを色でわかるようにしてあるの。もし黒だったら「よく働いていない」ってわけね。

工場の外では、オーエンさんは、とってもおしゃべりです。「インスティテュート」の開館式の時など、オーエンさんは、長い長い話をしていました。その日は、みんな仕事を休みました。私は、お父さんの肩の上に座っていました。みんな拍手しました。時々私のお父さんは、オーエンさんの物まねをしました。オーエンさんは、新しい「システム」の

話や、悪魔や無慈悲がなくなる話をします。私は、それが好きです。

私たちは、朝6時に仕事を始め、9時に仕事を止めて家に帰って、朝食にポーリッジ（スコットランドの大麦のおかゆ）を食べます。私たちは、ニュービルディング棟の「二つ続きの部屋」に住んでいます。そこには、私のお父さんとお母さんと、私のお姉さんとその旦那さん、私の兄弟2人、妹と赤ん坊、それにおばあさん。おじいさんは、もう死んでいません。

私のおばあさんは、スカイ島の出身です。おばあさんは、島を出て新しい生活を始めようとアメリカに移住して行こうとしましたが、嵐で船が沈没してしまいました。おじいさんとおばあさんは、助けられて、デールさんにこのニューラナークに引き取られてきました。おばあさんは、今は病気で働いていません。お父さんは、おばあさんのことを、もう長くはない、もうすぐおじいさんのところに行くだろうと言っています。おばあさんとお父さんは、まだゲーリック語で話し合っていますが、おばあさんは、工場の騒音で、耳がよく聞こえなくなっています。

家族はみんなで働いています。でも小さい弟と妹のフェミーは、学校に行っています。上の階のリビングストンおばあさんは、私のおばあさんより年寄りですが、赤ちゃんの世話をしています。お父さんは、おばあさんのために、外の井戸から家の中まで水を運んであげています。それに私は、おばあさんに代わって、階段の掃除をしたり、伝言を頼まれたりします。赤チャンは、いいけど、おむつを乾かす匂いがちょっとね。

カークホープさんの家は、私たちの隣の部屋にカーテン越しに住んでいます。ロスさんと結婚している奥さんのエリザさんは、赤チャンがいます。下の階のマーガレット・スチュワートさんは、お産婆さんです。このおばあさんは、人が亡くなると葬式の世話ししてくれます。おじいさんが死んだ時も、このおばあさんが世話ししてくれました。

私のお友達のイゾベルは、まだ8歳なので、工場には行っていません。私たちは、日曜日に一緒に遊びます。時々私は、オーエンさんの家みた

いに、人がすくなくて、部屋の多い家に住みたいなあと思います。でもオーエンさんは私たちにとってもいい人で私たちをよく世話してくれます。オーエンさんは、「南京虫殺し」をくれたり、自分のグリーンハウスで出来た野菜もくれます。オーエンさんは、私たちが幸せになって欲しいと言っています。私は、幸せだと思っています。でも私のお姉さんのエリザは、ご主人のジョンと一緒に、とっても遠いカナダに行ってしまうました。みんな言ってたけど、カウンスルがお金を援助すれば、遠いところに行くこともなかったのって。

私は、オーエンさんが望んでいるように、12歳まで学校に行っていたかったけれど、お金が必要なので10歳の誕生日に工場に働きにでました。学校はとても面白かったわ。6歳になると、学校の2階の教室で勉強します。先生は、たくさん質問をしてくれます。私たちも負けずにたくさん質問をしました。いろいろのことを学びました。一度、ラナークの町に象とトラを見に行きました。先生は、裁縫も教えてくれました。ほかの学校に行っている子供たちに会った時、先生がムチで叩くって聞いて、驚きました。ニューラナークではそうしたことがないから。

私の小さな妹は、まだ2歳で、4歳になるまで行くナーサリーに行っていて遊んでいます。そこには、2人の大きい女の子がいて、子供の世話をしたり、お互いに親切にすることを教えています。学校では、男女ともユニホームを着ます。週に3回着替えて洗濯します。それに散髪や入浴もあります。

4歳になると、教室に移ります。私が4歳になった時、ブキャナン先生が教えてくれました。織物職人だったブキャナン先生は、フルーツを吹いてくれたり、歌や詩や謎々を教えてくださいました。ブキャナン先生はとっても陽気で、私たちはみんな、先生が好きでした。ブッジー先生は、私たちにダンスを教えてくださいました。見学者がたくさんダンスを見にきました。とってもたくさん見学者が来るので、ダンスの練習をしっかきやりました。ある時、多くのお供を連れてロシアの大貴族が訪ねて

来ました。ビレッジのバンドが演奏して迎えました。(くすくす笑う)。その方は、音楽が嫌いだったそうよ。時々、1日に60人以上の見学者が来ます。私たちって有名なのね。

工場で働いている今でも、私は、仕事が終わると、インスティテュートにある学校に行きます。20歳になるまでは、誰でもそうしています。でもたくさんの大人の人もそうしています。何人もの年寄りが読み書きを習ったり、音楽を楽しみに学校に来ます。特別に清潔や自助についての講習もあります。私たちは、歌ったり、ダンスをしたり、行進したりします。

誰も日曜日には働きません。中にはインスティテュートにある教会やラナーク町の教会に行く人もいます。ビレッジの中にゲーリックの教会もあります。マクドナルドさんは、年に一度やってきます。日曜日が楽しくない人もいますが、多くの人は、家庭菜園を耕したり、バンドの音楽を楽しんだり、ボール遊びをしたりして時をすごします。私は、友達と川のそばで遊ぶのが好きです。オーエンさんは、親切にしてくれます。第3ミルが焼けた去年、そこで働いていた人たちを、雇いつづけてくれました。オーエンさんは、私たちのために「性格形成のためのインスティテュート」というのを造ってくれました。それに新しい学校も。それから「病気基金」というのもつくってくれて、たとい病気になるっても、お医者さんが無料で診てくれます。お医者さんは、学校にも来て私たちを診察してくれます。週末にお金がこのと、銀行に預金することもできます。銀行は、お金を安全にまもってくれるし、利子もつけてくれます。時々お金をのこして、ショップで食べ物や必要なものを安く買うことが出来ます。

ニューラナークは、オーエンさんのお陰でよそと違ってしています。時々オーエンさんの考えは、ちょっとばかり変っているように見えます。時々オーエンさんの考えが分からない時もあります。オーエンさんは、とても厳しくこわく感じる時もあります。でもオーエンさんは、とても公平

で親切で、私たちの味方と私は思います。

これが私と私たちの物語です。ニューラナークとオーエンさんの物語です。皆さんはもう行ってしまふのね。でも私たちは生きています。ここで私たちが触ったり、使ったりした物や、座った椅子や、学校で勉強した壁紙やそこに立っていた床の中に、生き続けています。私たちは、過去なのです。でも未来の一部でもあるのです。私たちを憶えていてね。いつまでも。」(1999年バージョンの草稿から筆者が訳す。)

このアトラクション以外は、自由に出入りすることができるようになっており、第3ミルの1階は、お土産品店(ギフトショップ)になっている。隣の第2ミルの3階には「オーエンのウールハウス」と名づけ、エディンバラ・ウールン・ミルの名でお染みの羊毛製品の製造販売会社がテナントとして入り、各種のウール製品を安く販売して、ビジターの好評を博している。

このほか、ビジターセンターによる展示物には、ニュービルデング棟の中に「紡績労働者住宅」があり、1820年代と1930年代の労働者生活の様子が展示されている。

同様の施設に、ビレッジ・ストアがある。これは、オーエンが住民のために開設した安売りの会社直営の売店跡であり、1820年代と1920年代の販売商品が展示されている。またオーエンハウスが、1996年に公開されていて、オーエンの業績、資料などが展示されている。これらの3施設は、各1ポンドの入場料をとっているが、もちろんビジターセンターの入場料にはふくまれている。

もう一つの観光事業としてニューラナークは、無料で自由に公開されている。ナーサリー棟、スクール棟、さまざまな産業遺蹟や歴史的建築物が参観できる。

また元染料工場、機械工場には、皮革製品加工、家具、手工芸品、キルト加工、など職人の作業の公開、作品の販売がおこなわれている。ア

ロマセラピーオイルの販売などもおこなわれている。ナーサリー・ビルディングでは人形、人形用家具などの販売がおこなわれている。カウンティング・ハウスの2階には古本屋もある。

第4ミルの跡地には、ニューラナーク建設期の水車が復元されている。このほか、ニューラナークには、ワイルドライフ・トラストの直営するセンターが元染料工場の一角にあり、同トラストの保持するクライドの滝への自然観察・散策道の入り口となっている。とくにクライドの滝は、イギリスでも有数の滝で、高さ7メートル幅5~6メートルの大きなもので、かつてイギリスの代表的画家ターナーもここを訪れて、この滝を描いている。クライド川沿い散策道は、風光明媚な自然を満喫でき、鹿、フクロウ、カワセミ、絶滅寸前のバージャー（穴熊）をみることができる。

ニューラナークは、1日十分に時間をかけて、クライド川周辺の自然を楽しみながら、18世紀末の産業建築物と19世紀初めの労働者の生活を見聞して、楽しみをあたえるだけでなく、歴史認識を深め、とりわけ子供たちには、社会歴史教育の恰好の素材を提供してくれる。

(1) Lorna Davidson, Dennis Hardy THINKING OF HERITAGE The Case of New Lanark, Middlesex University, 1992, p. 22.

(2) 同上書, p. 27.

(2) 観光事業の成功

観光事業と併行しながら展開したニューラナークの保存運動は、ほぼ成功したと評価できるし、またそのようにイギリスでは評価されている。成功したという評価の指標は、幾つかの面で証明される。

まずそれは、ビジターセンター開館以来のビジター数の増加に如実にあらわれている。ニューラナークが単なる産業遺蹟として公開されていた1975年から1980年には、ビジターは年に1万人くらいだったが、ビジターセンターを臨時的に開設して修復した建物を公開し、50ピーほどの安い料金をとって小さなショッピングコーナーを設けた1985年に、すでにビ

ジター数は8万人にもたっし、ニューラナークへの関心の高さ、観光事業への潜在需要を暗示していた。1990年12月の「アニー・マクロードの経験」の企画を発表してから、ニューラナークへの関心は一挙に高まった。

第4表に示したように、ビジター統計は、3種類にわけられている。第1は、ニューラナークを訪れ、無料の施設か有料の施設かを見学し楽しんで人々の総数である。第2は、有料の施設に入場料を払って入館した人々の数である。第3は、団体やグループで事前に有料施設の入館を申込んだ人々の数であり、これは第2の数にふくまれている。

ビジターセンターの公式開館は1990年の12月14日であるが、すでに前評判も高く、この年には約15万人がニューラナークを訪れ、約10万人が入場料を払ってセンターに入館した。その2割が団体であった。

その後、ニューラナークの評判の高まるのに応じてビジターの数は次第に増加していった。ビジター総数は、1991年に一挙に約26.6万人に、

第4表 ニューラナークのビジター数

	ビジター総数	入場者数	グループ入場者
1975～80年	10,000		
1985年	80,000		
1990年	150,000	103,957	19,078
1991年	265,550	138,977	27,407
1992年	342,000	149,289	32,443
1993年			
1994年	337,500	141,738	33,025
1995年	360,500	145,649	34,823
1996年	400,000	130,000	30,000
1997年	300,000	108,000	25,000
1998年	355,000	105,000	28,000

注：NLCトラストの資料による。

ビジター総数とは、ニューラナークへのビジター総数で、推計数。

入場者数とは、ビジターセンターに料金を支払って入場した数。

1992年には、34.2万人と前々年の2倍に増加した。その後ビジター数はふえつづけ、1995年には36万にたっし、1996年には、40万人にたっし、5年前にたてたビジター総数40万人の目標に到達した。

他方、ビジターセンターの入館者は、1991年には、前年より4割近くふえ、約14万弱となり、さらに1992年には14.9万人となった。しかしセンター入場者数は、1995年に14.5万人を維持したが、入場料支払者数は、開館後5年の目標20万人に大幅にたっせず、問題をのこし、その後も入場者数をへらしていく。

明らかに1990年代の後半に入って、ビジター数は停滞し、ビジター総数も、1997年には30万、1998年には35万人となっている。とくにビジターセンターへの入場者数は、1996年13万人から、1997、98年に10万人台に停滞ぎみである。

とはいえ、ニューラナークが、観光地として30万から40万人を集めていること、目標にはたっしていないが10万人程度のビジターセンターへの入場者をえていることは、全体としてニューラナークが成功したと評価することができる。後に詳しくみるように、経営的には、センターへの入場者の停滞は、ミルホテルの開業によって十分に償われていることになるからである。

なおついでながらここでビジターの特徴について若干分析しておこう。スコットランドは、寒い国である。ビジターの季節変動は、施設の経営にとって大きな問題である。第5表は、月別のビジターセンター入場者数の動向を示したものである。

ビジター数の季節的変動は、各年によって多少変化があるが、その原因は、おもにその年の気温・天候の変動にある。しかしイギリスの休日のあり方を反映して、日本のように季節的な偏りが比較的少ないのが特徴であり、経営にとっては有利な傾向である。日本の場合は、極端に5月、7月、8月のビジターが多く、他の月との落差が著しく大きい。たとえば、北海道の夕張炭鉱遺蹟博物館のある夕張市へのビジター数は、ピークの8月と

第5表 月別ビジター数

A ビジター総数					
	1991年	1992年	1994年	1995年	%
1月	2,500	15,000	14,000	14,500	6.1
2月	5,000	17,500	17,000	20,000	5.5
3月	12,000	25,000	21,000	23,000	6.4
4月	12,550	33,000	35,000	43,000	11.9
5月	22,000	36,000	36,000	40,000	11.1
6月	28,000	33,500	32,000	32,500	8.9
7月	42,500	40,500	37,000	46,000	12.8
8月	41,000	41,000	41,000	43,000	11.9
9月	34,000	27,500	32,000	27,000	7.5
10月	23,000	26,000	29,000	27,000	7.5
11月	17,000	22,000	21,000	21,000	5.8
12月	26,000	25,000	22,500	23,000	6.3
合計	265,550	342,000	337,500	360,500	100.0

B 入場者数

	1991年	1992年	1994年	1995年	%
1月	1,826	6,967	3,553	3,525	2.4
2月	3,753	5,842	4,804	6,167	4.2
3月	8,660	8,554	7,157	7,815	5.4
4月	9,275	15,016	14,141	17,018	11.7
5月	14,190	15,644	16,883	17,018	11.7
6月	15,527	16,714	18,107	16,426	11.3
7月	19,564	19,092	18,387	20,809	14.3
8月	20,601	18,564	19,823	18,533	12.7
9月	14,296	11,033	12,083	10,226	7.0
10月	9,998	10,164	10,240	10,126	7.9
11月	8,002	9,365	7,937	7,878	5.4
12月	13,285	12,334	8,623	9,608	6.6
合計	136,988	149,289	141,738	145,649	100.0

注：NLCトラストの資料から作成。

ボトムの11月の格差は、16倍もある。他方イギリスは、3倍にしかすぎない。観光行動の比較において、日本における短期間への客の集中・混雑化という問題が指摘できる。逆にイギリスの場合は、集中がある程度さけられ、月別分散が著しい。その原因は、連休取得の分散化傾向である。とくに12月のクリスマス休暇と4月のイースター休暇が月別平準化に貢献している⁽¹⁾。

ビジターセンター入場者の月別構成は、総ビジター数より季節性が高いが、日本よりはかなり低いと想像される。

またビジターセンター入場者の中身のみをみよう。第6表に示したNLCトラストが1995年におこなったビジター調査(サンプル数364)によると、「どこから来たか」の問いでは、スコットランド内からが70%であり、今のところビジターの地域性を強く反映している。しかし欧米からのビジターも多く11%にもたっし、今後の需要拡大の可能性を示唆している。スコットランド以外のイングランド、ウェールズのビジターも16%あり、同じく今後の潜在需要を示唆している。

ビジターのアクセス方法は、ニューラナークのロケーションとイギリスの交通事情を反映して、マイカーが74%にもたっている。鉄道が16%にとどまっている。

ビジターにはリピーターも多く、2回目以上が40%も占めており、また3回以上が20%もあり、人気の高さを示唆している。ニューラナークのビジターによる評価もかなり高く、90%が肯定的に評価しており、その内60%が「すばらしかった」と高い評価をあたえている。このアンケート調査の結果は、ニューラナークの観光事業が成功していることを示す指標の一つといえよう。

さらにニューラナークの成功の指標は、ニューラナーク保存運動と観光事業にたいする高い社会的評価があげられる。1990年以前については、まず1971年に一連の建物修復活動にたいし、ニューラナーク協会にシビック・トラスト賞(Civic Trust Award)があたえられた。1986年にユネ

第6表 ビジターのアンケート調査

1. どこからきたか	%	2. 交通手段	%
スコットランド	70	マイカー	74
ラナーク周辺	14	鉄 道	16
グラスゴー	14	地域バス	2
エジンバラ	8	長距離バス	4
中央スコットランド	13	そ の 他	4
そ の 他	21	合 計	100
イングランド	14		
ウエールズ	2	3. ビジター回数	
ヨーロッパ	8	今回初めて	57
米国・カナダ	3	2回目	20
そ の 他	3	3回以上	20
合 計	100	不 明	3
		合 計	100
4. ビジターの観想	%	5. 一緒にきた人数	%
すばらしかった	60	1~2人	18
よかった	30	3~6人	54
少しはよかった	3	7~9人	18
よくなかった	1	10人以上	8
不 明	6	不 明	2
合 計	100	合 計	100

注：サンプルは、354。NLCトラストによる1995年7月16日～8月10日の調査

スコ世界遺産地域に指定されたことをあげなければならない。これは、初期産業革命期の紡績工場およびそのビレッジの価値とその修復、さらにロバート・オーエンの社会改革活動の場となったことへの高い評価を示すものであった。また1987年には、トラストの一連の保存活動にたいし、ヨーロッパ文化自然遺産保存国際協会連合から、ヨーロッパ・ノストラ・メダル (Europa Nostra Medal of Honour) が授与された。

1990年にビジターセンターがオープンして以後、とくに観光化事業に

については、1991年に、おもに「アニー・マクロードの体験」企画を中心とするビジターセンターの事業にたいしイギリス観光局の「カム・トゥー・ブリテン」賞 (Come to Britain Trophy)、スコットランド観光局のオスカー賞 (Scottish Tourism Oscar)、また事業計画にたいし、ロイヤル・タウン・計画研究所 (Royal Town Planning Institute) からは計画達成賞 (Award for Achievement) が授与された。

また1991年には、数百万人がみるBBCの日曜日午後6時前後に放映されるテレビ番組「ソング・オフ・ブレス」に取りあげられ、広く宣伝された。

1992年には「アニー・マクロードの体験」企画にたいし Scottish Thistle Award があたえられた。また1995年には、水力発電を復活させた努力にたいしユーロソーラー UK 賞 (Eurosolar UK Award) が、またトラスト理事長のジム・アーノルドの個人的努力にたいし Scottish Business & Finance Award が授与された。またイギリス都市再開発協会 (British Urban Regeneration Association) からニューラナークの再生努力にたいし優秀賞 (Best Practice Award) が授与された。また1998年にオープンした第1ミルホテルは、99年3月に建築と環境をうまくデザインした素晴らしい事例としてシビック・トラスト賞を授与された。

こうした一連の社会的評価は、ニューラナークの保存運動と観光事業化の成功を示す重要な指標である⁽²⁾。

ニューラナークの事業の成功は、もう一つの指標として地域経済への貢献をあげなければならない。それは、ニューラナークの保存運動と観光事業化がビレッジ内外に多くの雇用を創出したことで示される。

雇用創出という場合に三つの側面が考えられる。第1は、ニューラナークの修復・建設業務にたずさわった直接雇用であり、第2は、ビジターセンターを中心とする観光事業にたずさわっている雇用である。第3は、ニューラナークの観光事業の展開から派生する地域経済の波及効果から生じる間接的雇用の創出である (第7表参照)。

第7表 ニューラナークにおける雇用創出

	人口	直接雇用	内トラスト	修復臨時	間接雇用
1951	550				
1964	300	350			
1973	108	20			
1980年代				年間 250	
1989		23			
1990年代				年間 100	年間 350
1990		59	23		
1994	150	100			
1995			48		
1996			49		
1997		156	54		
1998	180		109		
1999		200	132		

注：NLCトラストの各種資料から作成。

第1の雇用については、ニューラナークの資料によれば、1980年代には年間250人が保存活動のために雇用された。また1990年代に入ってから保存・建設活動にも、年間100名でいどの建設作業員が投入されているという指摘がある⁽³⁾。補修作業投入資金額からみても80年代に劣らないかなりの労働者数が雇用されたと推測される。

第2の雇用は、恒常的な雇用としてより重要である。NLCトラストの資料によれば、1989年には、ビジターセンター内の雇用は、23名だったが、1990年のビジターセンターの正式オープン時には59名となり、その内トラスト関係が38名であった⁽⁴⁾。1994年には、ビジターセンターに100名近くが雇用されていたが、トラスト関係は不明。その後トラスト関係の雇用は、1995年には48名、97年には54名、ホテルの開業で98年には109名、1999年8月現在では132名と増加している⁽⁵⁾。トラスト以外の

雇用は、70～80名近くにたっている。

1997年には、156名ほどだったビレッジの雇用は、ホテル従業員が40～50名ほどくわわって210名近くに増加した。

失業率の高いイギリスやとくにスコットランドでは、こうした雇用の創出は、非常に高く評価されている。しかもニューラナークのように荒廃して何もなくなってしまった地域に200名以上の雇用を創出したことの意義は大きい。

ちなみに雇用の職種構成についてみると、第8表に示したとおりである。1997年4月現在のニューラナークにおける雇用者の構成がわかる。雇用

第8表 ニューラナークにおける雇用構成

企業名	業務内容	雇用者数	配置場所
New Lanark Trading Ltd.	ビジターセンター	50	Mill 3, 2階
New Lanark Enterprise Ltd.	施設内作業, 補修	9	Mill 3, 6階
New Lanark Conservation Trust	保存活動	5	Mill 3, 6階
New Lanark Association	住宅管理	1	Mill 3, 6階
Heritage Engineering	歴史的機械等の修復	11	Mill 3, 1階, 6階
The Delphic Group	情報技術マルチメディア	31	Mechanics' Workshop 2, 3階
Extras	ハンドクラフト	1	染色工場
Scotair Balloons	熱気球あげ	3	Mill 3, 6階
The Kilt Centre	キルト製造	2	染色工場
Treats	アロマセラピー・オイル販売	2	染色工場
Midget Gems	ドール用, ハウス家具販売	2	ナーサリー棟
Scottish Wild Trust	自然保全	3	染色工場
Scottish Youth Hostel Association	ユースホステル経営	4	ウィー・ロー
Edinburgh Woolen Mill	ニットウェア販売	15	Mill 2, 3階
Geddes and Grosset	出版	14	デービッド・デール・ハウス
合計		156	

注：NLCトラストの資料による。

なおビジターセンターの雇用では、フルタイムとパートとの区別がされていない。ここでは、トラスト関連の雇用数が66名であるが、トラスト会計年報の数字は、54名であり、ここには、パートが少し含まれているようである。

第9表 最近のトラスト関係の雇用構成

(1999年9月現在)

	幹部スタッフ	管理職	一般
トラスト本体	4	1	11
ニューラナーク商事		3	47
企業研修・ホテル会社	1	4	59
ニューラナーク協会			2
合計	5	8	119

注：NLCトラストの資料より作成。

パートタイマーや研修学生は、これに含まれていない。

者の内訳は、大きく二つにわけられ、第1は、トラスト要員およびトラストの付属機関の要員である。第2は、ビレッジ内の施設にテナントとして入って活動か営業をしている組織の要員である。トラスト系は、ビジターセンターを運営しているニューラナーク商事に雇用が、50名（ただしパートが含まれているか不明）、ニューラナーク企業研修社が9名、本体のニューラナーク保存トラストの職員も5名、兄弟組織であるニューラナーク協会の職員1名、合計65名である。

第2のテナント系の雇用は、全体の58%を占め、総勢90名である。機械工作工場棟にテナントする企業が31名、エディンバラ・ウールン・ミルが15名、デールハウスにテナントする出版社が14名、施設内の補修工事を請負っている企業が11名、また少数ながら木工、皮細工、キルト加工などのクラフトの作業を見せる職人も配置されている。オイル・アロマセラピーストも2名いる。ユースホステルもテナントとして4名が中央組織から派遣されてきている。スコットランド・ワイルド・トラストが染色工場の一部をテナントして、3名の係員をおいている。

第3の雇用創出は、間接的な雇用創出である。正確な資料はないが、90年初めのトラストの資料によると、ニューラナークの事業が外部にあたえる経済効果を、雇用の面で350名の雇用創出と予測している⁽⁶⁾。その内、265名がラナークシャーの雇用創出であるとみており、ニューラナーク周辺地域への波及効果の大きさを示唆している。

確かに30万から40万人の人々がニューラナークを訪れることは、ビジターセンター内に膨大な入場料と消費金額をおとし、第1に、センター内で購買されるさまざまな商品の外部からの供給、キャンティーンで消費される食料品、その他の資材の供給は、膨大な需要を創出し、地域経済の活性化に貢献しているはずである。また多数のビジターがビジターセンター外の地域で消費する金額もまたかなりのものであろう。たとえば、ビジターがニューラナークの周辺ガソリンスタンドで購入するオイル代金、パブやストアでの消費額、などもニューラナークの周辺経済への波及効果である。

以上のように、ニューラナークは、地域に雇用を創出し、地域経済の活性化に大きく貢献することに成功していると評価することができる。

- (1) 抽稿「夕張炭鉱遺蹟の観光資源化について」『経済志林』第67巻第1号、1999年7月、参照。
- (2) 受賞については、NLCトラストの資料による。
- (3) NLCトラストの資料による。
- (4) 前掲 THINKING of HERITAGE, pp. 73, 75.
- (5) NLCトラストの資料による。
- (6) 前掲 THINKING of HERITAGE, p. 74.

(3) 経営事情

最後にニューラナークの観光事業の経営問題についてふれておきたい。ニューラナークの保存と観光事業化のためには、トラストの資料によれば、1991年頃までに1000万ポンド、1997年までにはほぼ2500万ポンド（1ポンド200円で50億円）が投資されたといわれている⁽¹⁾。イギリス、スコットランドでは、もっとも土地、建物資産そのものは高くなく、ニューラナークの保存と観光開発費用は、土地の新たな取得や新しい建物を建てるのがほとんどなく、もっぱら建物の修復だったことも、投資額が比較的安く抑えられている理由である。

日本の事例では、土地を取得し、新たに建物が建てられるケースが多く、それだけ費用がかさむ。たとえば、夕張市の炭鉱博物館化事業をみると、そうした観が強い¹²⁾。

これまでの投資金額の細かな内容については不明だが、1983年から新しい方針のもとに、ビジターセンター開設以後の事情は幾分明らかになる。

1983年に観光化と並行して保存運動が展開されたが、すでに指摘したように、とくにビジターセンターの中心施設となるインスティテュート棟と第3ミルの改修事業は、ナショナル・ヘリテージ基金から資金贈与され、周辺環境の整備には、各政府系機関が自らの資金によっておこなった。

1986年から1989年にむけておこなわれた3ヶ年計画の投資の内容は、すべて助成金・寄付金であったが、第10表に示したように、この資金調達の内容は、ビジターセンター開発3年間プロジェクトの寄付金一覧(List of Donors)によって明らかである。

このプロジェクトは、ビジターセンターの建設であり、具体的にはインスティテュート、エンジンハウス、第3ミルの修復と「アニー・マクロードの体験」施設の設置であった。

総費用は131万4684ポンドであるが、公的機関からの寄付基金が、全体の85%になっている。公的資金への依存度が高かったことがわかる。しかしこれは、イギリス政府(スコットランド政府もふくめ)が、貴重な歴史的産業遺蹟の保存に十全な理解を示しているものと理解できる。

公的資金からの補助金も、補助対象の相違によって各方面からおこなわれていて、一つの機関に集中していないのも特徴的である。

こうした資金源の分散も、トラストが意図的に努力したことがうかがえる¹³⁾。

公的機関からの資金の内訳は、スコットランド地方機関と中央政府系の機関とにわかれているが、前者が4割、後者が6割の比率である。前者の2機関は、ヘリテージの保存のための機関からの補助金であり、後者は、2自治体からの補助と、スコットランドのヘリテージ保存機関と観光局から

第10表 ビジターセンター開発プロジェクトの寄付団体名一覧

(単位万ポンド)

公 的 機 関	111.8	
Historic Scotland		19.7
Strathclyde Regional Council		8.0
Clydesdale District Council		12.0
National Heritage Memorial Fund		30.0
Scottish Tourist Board		33.5
European Community (Preservation of Architectural Heritage)		8.7
民間トラスト	16.4	
Carnegie UK Trust		2.5
Clothworkers Foundation		2.5
Monument Trust		3.3
Esmee Fairbairn Charitable Trust		2.0
Tudor Trust		1.0
21 other Trust		
企 業	1.3	
Cooperative Wholesales Society		1.0
9 other		0.3
個 人 等	2.0	
合 計	131.5	

注：Lorna Davidson, THINKING of HERITAGE, p. 68, より作成。

の観光開発補助金である。

民間のトラストからの資金援助も12%ほどあり、少額ながら多くのトラストから支援をえているのが特徴的である。その他の企業、個人の寄付も合わせれば3.6%もあり注目される。

1990年に一応ニューラナークの保存と観光化が端緒だったが、NLCトラストは90年代に入って、すでに述べてきたようにさらに保存と観光化の充実をはかった。その資金の最大の支援機関は、中央政府機関である

ヨーロッパ地域開発基金（European Regional Development Fund，以後 ERD 基金と略す）からのものであった。同基金は、ニューラナークの環境保全と観光事業の充実のために、1991 年から 1996 年までに 423.5 万ポンドの巨額な助成金（Grant）をあたえている。

その内訳は、第 11 表のとおりである。その支出で大きい項目は、第 1 ミルの修復とホテル化のための資金で、308.7 万ポンド約全体の 66.6%にもたっている。残りが、ビジターセンターのための環境整備、出し物の改善、いまだ未完の建物の修復費などにあてられた。

もっとも各種プロジェクトのための資金では、ERD 基金の負担は、1996 年まで 45%であった。したがって 55%がその他の支援機関からの支

第 11 表 ヨーロッパ地域開発基金（ERDF）からの助成金

（単位万ポンド）

プロジェクト名	支給年	補助金額
環境改善事業(駐車場, 景観整備)	1986	40.0
第 4 ミル跡の景観整備, 水車復元, 機械作業場整備	1991	10.0
ビジターセンター充実(発電機復活, クリスマス特別出し物 ナレーションの外国語版制作, ビレッジ・ストア修復)	1992	10.0
第 1 ミル修復第 1 計画	1993	94.0
第 1 ミル修復第 2 計画	1993	47.8
ウィー・ローのユースホステル化の補修	1993	22.8
ビジターセンター充実(動力復元作業, 労働者住宅公開 オーエンハウス改修)	1993	20.4
駐車場拡張	1995	11.4
第 2 ミルの南外壁補修	1995	23.7
広場環境の改善	1995	6.3
ビレッジ標識設置	1995	3.4
アニー・マクロードの体験の改善	1996	6.8
第 1 ミル修復第 3 計画(インテリア部分)	1996	166.9
合 計		463.5

注：NLC トラストの資料による。

援であった。それらの機関は、ラナークシャー開発機構、ヒストリック・スコットランド、スコットランド観光局、ストラスクライド地域カOUNシル、クライスデール地域カOUNシル、サウスラナークシャー・カOUNシル、スコットランド自然ヘリテージ、その他、トラストや民間企業や個人の寄付であった。

1996年以降については、日本でも有名なナショナル・ロットリーとよばれる宝くじ財団によるヘリテージ・ロットリー基金（Heritage Lottery Fund）からの助成金が注目される。1996年にヘリテージ・ロットリー基金は、第1ミルのホテル化をすすめるための内装資金として180万ポンドを支給した。

なお第1ミルのホテル化のため、1990年の計画では300万ポンドはかかるだろうと予測されたが、ERD基金からの300万ポンドをふくめると500万ポンド（約10億円）近くの投資となった。

またオーエンの学校は、ヘリテージ・ロットリー基金の補助金をえつつ修復工事がおこなわれており、2000年にオーエンの学校教育の思想を紹介しつつ公開されることになっている。

以上のようにニューラナークの保存と観光化には、国家資金が大量に投資されたが、文化政策、環境保全政策、地方開発政策などをおこなう機関からの補助金であり、また民間の基金からおこなわれ、初期をのぞけば、債務による資金調達をおこなっていないことが特徴的である。住民のボランティア活動や民間の寄付にもささえられながら、無理のない現実的な資金計画のもとにおこなわれた。

最後にトラストの事業経理について簡単に分析しておきたい。さいわい1996年から98年までのトラストの会計年報を閲覧することができたので、ごく最近の事業経理の特徴を明らかにしておこう。しかしトラストの組織が複雑なだけでなく、資金の出入りは、非常に複雑で、経理内容がわかりにくいのが、ここでは簡略化して分析してみたい。

第12表は、NLCトラストの財務の概要を示したものである。トラスト

第12表 NLCトラストの財務バランス

(単位万ポンド)

	1995	1996	1997	1998
収 入				
寄付雑収入	2.1	5.7	1.2	0.2
利子収入	6.5	6.0	5.8	5.0
賃貸料収入	10.5	9.7	8.9	12.4
修復開発投資への補助金	51.0	66.0	324.4	41.8
人件費管理費への補助金	11.2	13.5	14.4	29.7
(補助金合計)	62.2	79.5	338.8	71.5
繰越し収入	3.5	6.9	2.4	0.6
下部機関の事業収入	19.6	24.4	27.1	31.1
収入合計	104.4	132.3	384.2	120.7
補助金/収入合計	59.4	60.1	88.1	59.2
支 出				
ビレッジ修復投資	54.5	72.9	326.8	42.4
教育支出	2.5	2.7	3.3	3.0
開発宣伝	3.9	13.4	8.5	19.8
経営管理維持費	9.2	13.6	12.2	28.4
合 計	70.1	102.6	350.7	92.6
剰 余 金	34.3	29.7	33.5	27.1
トラストファンド総額	174.1	203.8	237.3	264.4

注：NLCトラスト会計年報から作成。

の収入は、おもに①補助金、②附属機関からの事業収益、③テナント料や利子、寄付の3種である。

補助金は、二つのカテゴリーにわけられていて、一つはビレッジの修復、環境整備などの開発投資のための補助金であり、1995年以来、一般的には年額40万から60万ポンドの助成水準で推移している。97年は、第1

ミルのホテル化の改修費用が特別に助成されたために、324万ポンドにもたっている。もう一つは、人件費・管理費への補助金で、1995年以来毎年11万、13万、14万ポンドと推移し、1998年にホテルがオープンしてホテルのためのマーケティング費が増大して30万ポンド近くに増加した。後に2種の内容を詳しくみる。

つぎに附属事業からの事業収益であるが、ビジターセンターを運営するニューラナーク商事と、施設を補修するニューラナーク企業研修社、後にホテル会社に吸収された、2団体からの純益がトラストに還元されている。

1995年の20万ポンドから漸次増加し、96年25万ポンド、97年27万ポンド、98年31万ポンドと、事業経営の好調さを示している。

その他の収入は、ニューラナーク内で営業を営む各種業者からの建物賃貸料で、各年10万ポンド前後に推移し、かなりの額である。利子収入は、トラストが附属組織などへの投資への利子である。その他に寄付や雑収入が若干ある。

総収入の内、補助金の占める比率は、95年には59.6%から次第に低下し、98年には41.7%にまでなっており、補助金への依存度を低めている。もっとも投資が将来なくなるか減少すれば、当然補助金への依存度は激減することになり、経営的な見通しは明るい。

支出では、保存修復関係への投資支出が過半を占めており、近年開発宣伝費などへの支出が増加しているのが目立つ。

収支バランスは黒字で、収入の3割近くが余剰金として、NLCトラストファンドに積み立てられ、将来独自の保存修復費用のためにプールされている。トラストの経営の健全さをうかがうに充分である。なお支出における人件費部分については、人件費の算定が複雑なため、ここでは算定されず、別途に算出されている。

第13表は、ニューラナークの雇用者の人件費を算定したものである。ホテルオープン以前はほぼ32万、33万ポンド程度であったが、ホテル営業開始によって63万ポンドに増加した。人件費は、トラストのために直

第13表 NLCトラストの件数費と要員

(単位万ポンド)

	人員	件数費		人員	件数費
1995	48	32.3	1997	54	33.8
1996	49	33.4	1998	109	63.7

注：NLCトラスト会計年報から作成。

件数費は、賃金および社会保障費。ちなみに1999年9月には人員は132である。

接働しているスタッフの件数費と附属組織で働く要員の件数費の2種があって、前者はトラストの経営管理費の中にふくまれ、後者は、附属組織の管理費の中にふくまれているが、詳細は不明である。

さてトラストの収入の内、補助金の内容についてみてみよう。第14表は、トラストへの各機関の目的別助成金を示したものである。すでに助成のパターンについては論じてあるので、詳しくはふれないが、すでに指摘したように、トラストへの補助金は、保存修復費とトラストの件数費管理費への補助の2種であり、すべて寄付(dornations)とか助成金(grant)とかよばれる無償の給付である。

第2の助成金は、おもにトラストスタッフへの件数費助成とビジターセンターの特別な費用、たとえばミレニアム対策費、宣伝広告費などである。

つぎにビジターセンターの収支をみてみよう。第15表に示したように、収入は、2附属組織からの売上げ(ビジターセンターへの入場料、センターのキャンテーンの売上げ、ギフトショップの売上げ、企業研修会社の収入など)である。1995年は94万ポンド、96年には93万、97年には88.8万ポンドと売上げ収入は、センターへの入場者の減少傾向を反映して、漸減している。

しかし1998年にオープンしたホテルの売上げが好調で、57.7万ポンドの売上げを記録して、総売上げを1998年に大幅に増加させており、ホテル経営の成功を証明している。

売上げ額から販売コスト・管理費・利子を差し引いた額が、純益であるが、1995年の19.6万ポンドから次第に増加し、98年には31.1万ポンドに

第14表 NLCトラストへの団体別目的別の助成金

(単位万ポンド)

団体名	目的	投資開発補助金		
		1996	1997	1998
Lanarkshire Development Agency	第2ミル南外壁	9.0		
	第1ミル修復	0.2	20.0	
	駐車場拡張, 標識	6.6		1.5
	環境整備		3.5	
	「アニー・マクロード」の改善	2.8	0.6	
小計		18.6	24.1	1.5
ERDF	「アニー・マクロード」の改善	4.4	2.4	
	第2ミル南外壁	18.7	5.0	
	駐車場拡張, 標識	10.9	2.2	
	第1ミル修復		124.3	9.2
	広場環境整備	0.4		0.7
小計		34.5	134.7	9.9
Historic Scotland	第2ミル南外壁	15.1	2.3	
	標識	0.9		
	ダブル・ロー修復	0.2		
	ロバート・オーエンハウス修復	0.2		
小計		16.4		
Esmee Fairbairn Charitable Trust	第1ミル南外壁	1.0		
South Lanarkshire Council	ビジターセンターの改善	0.2	3.4	6.0
Scotmid	第1ミル修復	0.1	0.1	
Co-op Union	ロバート・オーエンハウス修復	0.6	0.3	
National Heritage Lottery Fund	第1ミル, ウォーターハウス修復		159.4	23.8
その他				0.7
合計		71.4	324.4	41.8

注: NLCトラストの会計年報から作成。

第 15 表 ビジターセンターの営業収支

(単位万ポンド)

	1995	1996	1997	1998
売 上 げ 額	94.4	93.5	88.3	146.7
内 商 事	—	92.9	87.6	89.0
内企業研修・ホテル企業	—	4.4	4.6	57.7
販売コスト	-34.3	-31.0	-24.5	-35.9
粗 利 益	60.1	62.5	63.8	111.0
管 理 費	-40.8	-38.3	-36.9	-80.5
利 子	0.3	0.2	0.2	
純 益	19.6	24.4	27.1	31.1

注：NLC トラスト会計年報から作成。センター全体の数字は、内部調整ずみの数字であり、付属組織の単純な合計ではない。

伸びている。ビジターセンターの経営が順調に進んでいることを示している。

以上のように、ニューラナークの観光事業は、とくにホテルの開業によって完全に成功していると評価できる。

第 16 表は、NLC トラストへの人件費・管理費への助成金を示したものであるが、各年まったく同額ではないが、1997 年には、人件費への補助が 53,740 ポンド (37.4%) で、その他の管理費が 89,945 ポンド (62.6%) である。人件費は教育担当スタッフと開発担当スタッフの 2 名にたいする人件費である。管理費には、いろいろあり、年度によって少し異なっているが、ミレニアム対策費とか、パンフレット作成への補助とか、ホテル開館に対応するマーケティング費用、営業戦略を立てる計画費とか、経営を補強するために補助されている。

以上、ニューラナークの経営事情を簡単に分析してきたが、膨大な補助金によって運営されていることも事実である。NLC トラストは、自立的な経営を目標にしており、事実補助金への依存度も低下してきている。第 12 表をもう一度みていただきたい。もしもビレッジの修復が終われば、この部面への助成金はなくなるはずである。

第16表 NLCトラストへの人件費管理費助成金

(単位ポンド)

団体名	目的	人件費管理費補助金		
		1996	1997	1998
South Lanarkshire Council	教育担当	1,151	29,695	29,895
	開発担当	10,900	22,095	22,095
	管理費	33,300	33,925	33,925
	ミレニアム対策	16,000		
	パンフレット補助			5,000
	ホテルコンサルタント費			4,312
	営業計画費			2,500
小計		61,351	85,715	97,727
Historic Scotland	管理費	33,300	33,925	34,965
Lanarkshire Development Agency	開発担当	21,450	22,095	22,795
	ミレニアム対策費	16,000		
	営業計画費			2,500
小計		37,450	22,095	25,295
ERD基金	マーケティング			138,214
その他各種小団体	教育担当	3,380	1,950	330
合計		135,481	143,685	296,531

注：NLCトラスト会計年報から作成。

現在ビジターセンターの純益は、人件費・管理費助成金をこえている。すなわち、人件費・管理費への補助金は、1996年から13.5万ポンド、14.3万ポンド、29.7万ポンドであったが、ビジターセンターの純益は、1995年から19.6万ポンド、24.4万ポンド、27.1万ポンド、31.1万ポンドであり、補助金額を若干上回っているのである。もし人件費・管理費の補助金がなくなっても、現在のビジター数が維持されれば、ビジターセンターの純収益でなくなる人件費・管理費補助部分を十分に補完することができる。補助金なしでセンターの経営がおこなわれる可能性が充分にある。

人件費・管理費補助金がなくなるというシビアな状況は、イギリスの文化歴史遺産保護政策からは予想しえないが、ニューラナークの観光事業

が、厳しい状況下でも十分に耐えうる体質を備えていることを証明しているといえよう。

- (1) NLCトラストの内部資料。
- (2) 詳しくは、前掲拙稿「夕張炭鉱遺蹟の観光資源化について」を参照。
- (3) NLCトラストの各種の資料には、そうした指摘がある。

おわりに

以上のように、小論は、イギリスの貴重にして有力な産業遺蹟の保存運動と復元した産業遺蹟を観光資源とした観光事業をみてきたが、最後に、ここでニューラナークの保存運動とその観光化についての感想を述べておきたい。

第1に私は、この論文を書き終わって、イギリス人は民間・政府の粋をこえて、歴史的な産業遺蹟を大切に保存しようとする強烈な意識をもって、改めて感心させられた。それは、イギリス人の文化水準の高さを証明していると評価できる。

しかしそうした意識は、一朝にして出来上がったものではなく、イギリスの長い歴史の中で、培われてきたものであることを、われわれは知っておくべきである。

もっとも、古いものを大切にする発想は、日本のように木と土と竹でできていた建物とちがって、イギリスの場合はレンガや石でできていて耐久性が著しく長く、また地震がなく構造物の建て方が単純にして格安であるというイギリスの特殊事情に根拠をもっていることも事実である。

しかしそれだけをもって、イギリスの遺蹟保存運動を理解することはできないであろう。たとえば、自然や風景を保護し、歴史的な建物・文化を護って国民一般に公開してきたボランティア活動であるナショナル・トラストは、100年以上にわたる歴史があり、イギリス人が長い間、自然や歴

史や文化を大切にするために計り知れない努力を積み上げてきたことがわかる。産業遺蹟の保存運動もまた、そうしたナショナル・トラスト運動にみられる自然・風景・歴史的遺蹟の保存運動の長い歴史的な営みの成果の上に成り立っているということである。

第2に、イギリスの産業遺蹟保存運動が、中央政府や各段階の自治体の手厚い保護と理解のもとに、トラスト運動として、ボランティアによる民間の力で強力に、しかも熱心におこなわれていることに改めて感心したことである。

イギリス政府の産業遺蹟保存運動にたいする保護は、膨大な補助金によって財政化されているが、それは日本のように、無計画なばらまき行政ではなく、長期計画のもとに、実に着実に、かつ慎重におこなわれているのである。

しかもその保護が、日本にみられるようにどちらかといえば、お役所的な産業保護にあたえられるのではなく、自主的にボランティアにおこなわれているトラスト運動に、与えられていることが真に強烈な印象を与えてくれる。日本の場合は、自主的であれば、それだけ政府の保護が薄くなりがちである。また産業遺蹟保護の主体も、安易に第3セクターという方式がとられている。

しかしイギリス政府は、産業遺蹟の保存支持機関も、単なる補助金のばらまきではなく、慎重に保存運動の真価を問いながら、質的に高い保存運動を真剣に支援している傾向に、われわれは注目しなければならないだろう。

第3に何より、私は、貴重な歴史的文化的産業遺蹟が、観光資源となり、観光事業をつうじて保存され、維持され、人々に公開されていったという事実、改めて感心させられたことである。しかもその観光事業化が、トラストのもので通俗に陥らないように、また利益主義にならないように十分に慎重におこなわれていることである。まさに観光事業化が目的ではなく、あくまで手段であり、真の目的が産業遺蹟の保存と維持なのである。

また日本政府の補助金の場合、夕張炭鉱遺蹟の保存の事例にみられるように、産業遺蹟を真に理解しておこなわれるというよりは、産炭地の単なる過疎化対策、産業政策の後始末的な印象が強かった。産業遺蹟の観光化事業が、遺蹟を本当に保存しつつ、その遺蹟を有力な観光資源とすることが可能なのは、やはりイギリスに1世紀近く馴染んできたトラスト運動という存在があるからなのである。

私は、改めてイギリスにおけるトラスト運動の偉大さに心を動かされた。ついでながら指摘しておけば、私は、目下、ナショナル・トラストを取り上げて、とくにレジャーや観光のためのトラストにはたしている役割を検討しているところである。

第4に、ニューラナークの保存運動は、ボランティアによっておこなわれてきたが、もちろん政府の保護なしには実現しなかったであろう。逆にこの運動は、一般の民衆によっても、支持され協力をえておこなわれてきたことを無視してはならない。この点に関してもっとも印象的なことは、すでに指摘したことであるが、ニューラナークの保存運動の初期に、一般の住民が、昔の労働者住宅を購入して、保存運動の費用を軽減することに協力し、そこに住みながら、歴史的産業遺蹟の保存に協力していることである。今なお、数十戸の住宅に200名近い市民が居住し生活して、ニュービルディングとかロング・ローとかいった昔の紡績労働者の住んだ建築物の保存・維持に協力している。時にはプライバシーを覗かれたり、不愉快なこともあるであろうが。

またNLCトラストは、ニューラナーク友の会 (Friend of New Lanark) といった支援組織をつくって、一般市民の協力をもとめている。ナショナル・トラストのように全国組織ではなく、単発の遺産を所有し管理しているだけの小さなトラストなので、会員数は多くはないが、ニューラナーク・ビレッジの市民とともに、ニューラナークの保存維持に協力しているのである。

夕張炭鉱の遺蹟を保存しようという時、こうしたことがおこなわれなかつ

たことが、対照的である。

第5に指摘するとすれば、ニューラナーク保存トラストの献身的な努力とすぐれたアイディアに感心しないわけにはいかない。ニューラナークの保存運動で注目したいのは、保存運動のなかで、オーエンの思想を生かしながら、修復工事には、建設作業のトレーニングをおこなったり、ホテルは、「トレーニング」ホテルとして、ホテル学を学ぶ学生の研修所をも兼ねるといふ非常にユニークなアイディアを取り入れ実施していることである。また1930年代の水力発電機を復活させたが、その電力をスコットランド電力に売って幾ばくかの利益をえていることも指摘しておきたい。

単に「ハコもの」をつくって人を集めるだけの観光開発の時代は、とうの昔に過ぎ去ってしまった。小論は、イギリスの重要な一事例を検討しながら、21世紀の観光はいかにあるべきか、モノではなく、文化や歴史がいかに観光資源として意味をもつかについて考えるための、一つの素材を提供したつもりである。

最後に、小論で利用した資料の収集で、ニューラナーク保存トラストのLorna Davidson 女史に大変お世話になったので、ここで感謝の意を記しておきたい。